

水木しげるの戦い —戦争観と天皇観の超克—

本 間 光 徳

【要旨】

『ゲゲゲの鬼太郎』の作者として知られる水木しげるは歴史叙述的漫画作品、自叙伝的漫画作品の他、活字書籍も多数出版している。水木は漫画家としてのみならず、アジア・太平洋戦争の証言者としても活躍しており、その証言により、水木の漫画作品の解釈には一定の担保が与えられる。しかし、水木は「戦争反対」とは決して言わない。同時代的戦争経験にとどまらず、戦闘により左腕を失いつつも生涯創作を続けた水木は、「戦争反対」の声を上げず「楽園」を描くことによりナショナリズムに対し虚無主義的抵抗姿勢を貫いたのである。

【キーワード】

戦争、天皇、異界、楽園、虚無主義

1 はじめに

自らアジア・太平洋戦争に於ける激戦地ニューブリテン島での戦闘、負傷経験を持つ漫画家、水木しげるは『ゲゲゲの鬼太郎』の作者として知られるが、後年には歴史叙述的漫画作品、自叙伝的漫画作品の他、活字書籍も多数出版している。水木は漫画家としてのみならず、アジア・太平洋戦争の証言者としても活躍しており、その証言により、水木の漫画作品の解釈には一定の担保が与えられる。水木は独自の漫画論を展開し、手塚治虫に代表されるストーリー漫画との差別化を主張したが、小山昌宏は水木の漫画論を評し、「従来のマンガ、ストーリーマンガとどのように違うのか結論的に明示されることはなかった」と書く一方、水木の漫画作品を「創作者と読者の間に何らかの『問い』が存在するのではないかという先見性が見受けられる」と評価している¹。

また、ローマン・ローゼンバウムは、小林よしのり新ゴーマニズム宣言 SPECIAL『戦争論』（以下『戦争論』）及び後期『ゴーマニズム宣言』並びに山野車輪『マンガ嫌韓流』を右翼的言論であると批判しつつ、その対極に位置する反戦的主張として水木しげるの「戦争と日本」を例示しているのであるが、水木が自身の漫画作品の題材に小林よしのりの『戦争論』を取り上げ、戦中を懐かしく回顧している点は興味深い²。

2 水木しげると異界の認識

水木しげる（本名、武良茂）は1922（大正12）年3月8日、武良亮一、琴江夫妻の次男として大阪府粉浜村に誕生した³。しかし、水木が生後一箇月の時、一家で祖父辰司が建てた実家の所在地鳥取県境港に「帰郷した」ため、水木にとっては境港が生まれ故郷に等しい⁴。水木の自叙伝的作品は境港を題材とした幼少期から始まるのが常である。後に水木は、境港が神話の豊富な出雲の国（島根）と伯耆の国（鳥取）の境に立地しており、島根に感じた神秘的雰囲気と自らの幼少時の体験を関連付ける回想をしている。島根県の松江を描いたコマには「目に見えない／神々」が描かれており、不可視の神秘性は水木漫画作品の重要な要素である（図1）⁵。



図1.
松江の神秘性

目に見えない神々が表現されている。

水木しげる（2010）『私はゲゲゲ』角川書店 p.9

自然環境に加え、「のんのんばあ」こと景山ふさ氏（以下、のんのんばあ）の影響は大きく、幼少期を題材にした作品にはのんのんばあが頻繁に登場しており、後年水木は『のんのんばあとオレ』を出版している⁶。「のんのん」とは幼児語で祈りを意味し、「のんのんばあ」とは即ち「祈り屋婆さん」の意味である。しかし、水木によると、のんのんばあ自身は祈祷をする程の才覚は無く、夫が「拝み手」であった⁷。

のんのんばあは当初、水木の家で女中をしていたが、水木が小学校一年の頃、夫と死別し、爾後水木の家で「雑用やら子供の世話をして生活するようになった」⁸。水木が父亮一氏に聞いた話によると、のんおんばあは二十歳で祖父の家に女中奉公に来てよく働いたが、駆け落ちしてひどい目に遭い、戻ってきたところ、それを哀れんだ祖父が家を建ててやったとの事である。従って、水木の家（武良家）に対する恩義も感じていたであろうと推測される。のんのんばあは幼児であった水木を「しげーさん」とさん付けで呼んでいる。

のんのんばあは幼少の水木を世話しつつ、自身の宗教観にもとづく話を語り聞かせた。例えば、小学校に入学前の水木を加賀の潜戸へ連れて行った際、その洞窟が「死者の国」へ続くものであると説いている（図2）。水木は「私が妖怪の絵やマンガをかくようにな

ったのは、子どものときに、近所に、“のんのんばあ”というおばあさんがいたから」、「ぼくはのんのんばあに現実とは別の世界があることを教わった」と書いている⁹。

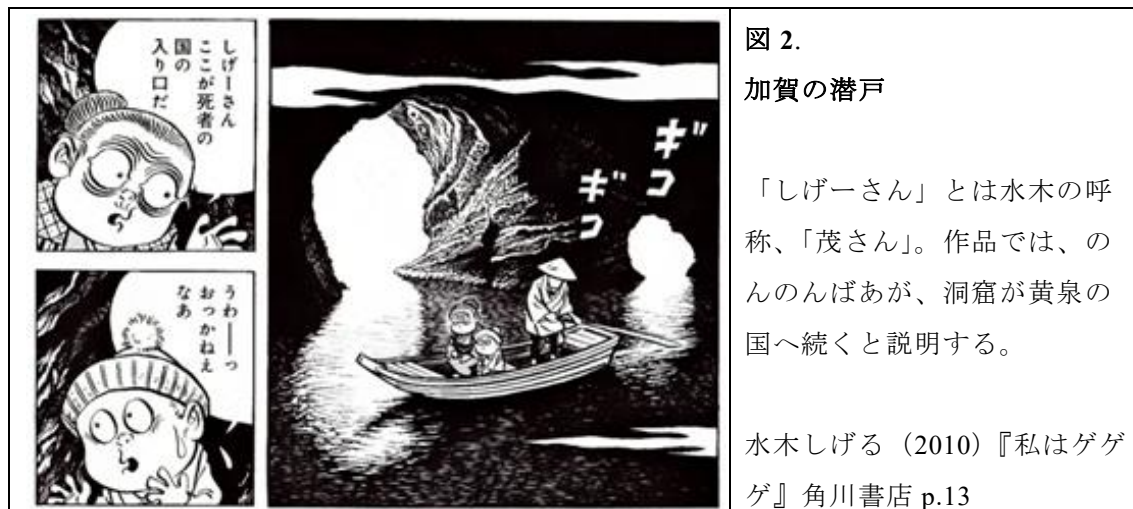


図 2.

加賀の潜戸

「しげーさん」とは水木の呼称、「茂さん」。作品では、のんのんばあが、洞窟が黄泉の国へ続くと説明する。

水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』角川書店 p.13

水木の回想では、「実際に」幽霊らしきものを目撃したのは水木が小学校三年生の時、実の祖母が亡くなって二日目の夜であった。漫画には水木の驚きと恐怖が描かれており、吹き出しには「ゆ／幽霊か／……」とのみ書かれている¹⁰。翌朝の食卓の絵では、父親が「ほう／でたか」、母親が「やっばりなァ／四十九日までは／魂は家におるけん」と、幽霊らしきものの出現や魂の存在が恰も当然事のように話される様子が描写されているのである¹¹。

また、水木の記憶では、「実際／当時は／人がよく死んだ」、「間引きも／よく行われ／ていた」し、女郎の自殺死体もしばしば目撃されている¹²。海岸には水死体が打ち上げられていることもあったという。

水木によると、のんのんばあは、寺にもよく幼少の水木を連れて行った。水木はその際の様子を活字でも以下のように鮮明に描写している。

寺には地獄極楽の絵がかかっている。僕は、その絵をじっと見入る。本当にある世界を描いたものだと思っているから、真剣になるのだ。そこへ、のんのんばあの真に迫った解説が入るのである¹³。

当該回想場面も漫画化されており、寺が境港市所在の曹洞宗の名利、巨嶽山正福寺であることが明示されている(図3)¹⁴。同寺に於いて水木は、のんのんばあの解説の後、夢か現かわからぬ世界で閻魔大王に地獄に来いと怒鳴られ、うなされる。のんのんばあに呼び起こされ我に返るのであるが、のんのんばあの台詞として、「しげーさんは／感度がいいけん／生きながら／あの世を／見たんだな」と書かれている¹⁵。この台詞がのんのんばあの実際の発話か否かは不明だが、水木は「もう一つの世界の解説者として、のんのんばあ

は必要欠くべからざる人であった」と活字書籍でも回想している。のんのんばあに関するこれらの回想には異界の存在を前提とする水木の信念が現れている。



図 3.

正福寺

上、のんのんばあに連れられ
正福寺鐘楼門をくぐる水木

下、寺宝の六道絵（極楽絵と
地獄絵）を初めて見る水木に
絵の解説をするのんのんばあ

水木しげる (2010) 『私はゲゲ
ゲ』 角川書店 p.35

水木は後に、「のんのんばあの信仰は、わけのわからない奇妙な信仰だった」と回想しているが、漫画の中でのんのんばあは「おんころころ／せんだり／まとうき／そわか」と薬師如来咒（真言）を唱えている（図 4）¹⁶。作品に描かれている正福寺は曹洞宗寺院だが、のんのんばあの家の「秘薬」は元密教寺院の一畑寺からビール瓶に詰めて持ち帰った正体不明の液体であったという¹⁷。

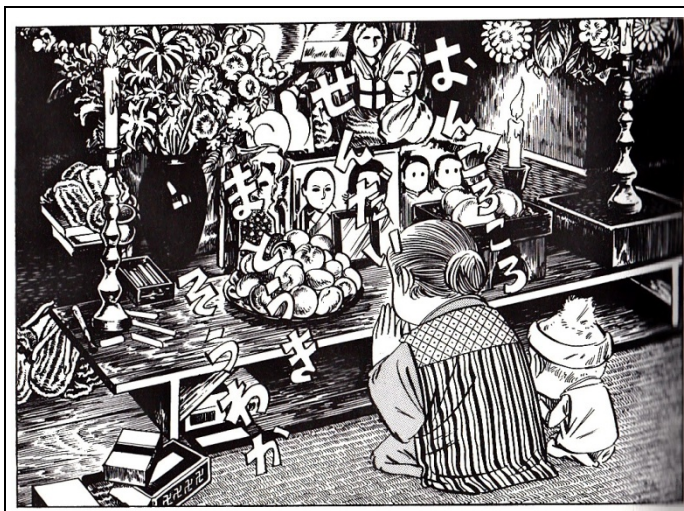


図 4.

のんのんばあ宅

自宅で薬師如来咒を唱えるのんのんばあと隣に座る水木

水木しげる (2005)『完全版水木しげる伝 (上)』講談社 p.45

水木の回想によると、近所の海岸に打ち上げられる死体が多く、幼少時代は「死体に異様なほどの関心」を持った¹⁸。人の死を「実験」すべく、弟の幸夫氏を海に突き落とした事件は (図 5) 漫画作品以外にも活字書籍や対談で語られている¹⁹。幼馴染の「松ちゃん」をはじめ、近所の子供たちは流行病に因り死亡している²⁰。のんのんばあも結核感染に因り死亡、幼少の水木には、想像の死後の世界と現実の死が一続きのものとして理解されたのであろう。



図 5.
実験

弟幸夫氏を自宅前の海へ突き落す水木とそれを止めにかかる兄宗平氏

水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』角川書店 p.43

水木の幼少期に於いては日常生活の中に「死」が身近にあった点が指摘されよう。次に作品に於いてその死者の霊、或いは幽霊を見た旨が主張されている点が指摘し得る。また、幼少の水木は仏教寺院の中で眠り、夢の中で閻魔大王に責められ苦悶している。漫画作品中に真言（咒）を唱える場面を描いており、思想的背景に密教系仏教の世界観を示唆している。従って、漫画作品に於ける神秘性の最終的担保として異界（非現象界）の存在が前提になっていると言える。

少年期の水木は腕白で、多趣味、高等小学校在学中の 1935（昭和 10）年、水木 13 歳の時には個展が開催され、毎日新聞に記事が掲載されている。後に水木は、手塚治虫や赤塚不二夫と並ぶ漫画界の巨匠となるが、少年期に人間の生と死に対する思想的探求があったことが推察できよう。

高等小学校卒業後の水木は、就職と解雇、学校への入退学を繰り返しつつ絵の勉強を模索している。

3 武良茂青年の戦争体験

3-1 青年の葛藤

水木しげるの戦争体験は、単なる同時代人としての戦争経験にとどまらず、1944（昭和19）年4月の末には南方の最前線バイエンに於いて唯一の生き残りとなり、間もなく連合軍の爆撃により左腕を失っている。

このような極めて過酷な戦争体験をしているにもかかわらず、水木はその特異な人柄とユーモラスな作風から、死を直視した苦悩が見落とされるきらいがある。出征後の水木は、その独特の性格に基づく特異な行動のために上官に精神異常を疑われた旨を後年作品に描いているが、出征前の水木は、召集令状を受け取り同年代の他の青年同様、衝撃を受け、死の恐怖、出征の不安を、「静かな夜、書き取りのペンの音が響く。その背後には静かな夜のやうに死が横はつてゐる。その心細さよ」とその手記に書き記している²¹。

水木の手記は先述の引用に始まり、2日（1942年10月）付けで「今日も恥多き日だった」と書かれており、同年11月7日夜までの精神的救済を求める苦悩が綴られている。

水木の苦悩は自身に自己否定を強いる苦悩であり、「深く知らなければ救はれない」、「自我を否定する時は今だ」、「自我を否定しないのは怠惰だ」書きつけ、基督教、仏教、哲学、博物、と漁るかの如く救いの道を求めている²²。

2日に「自我を否定しないのは怠惰だ」と書いた水木は、28日、「依然として怠惰」と書きつつも、50年後に漫画家・小林よしのりが描く「公」と「私」の葛藤を彷彿させる以下の記述が認められる²³。

死は恐ろしいさ、しかし怠惰で生きるよりは、死ぬの方が勝つてゐる。

怠惰なる生は無意義である以上、死をかけても無意を有意とするのが人間の使命ではないか。

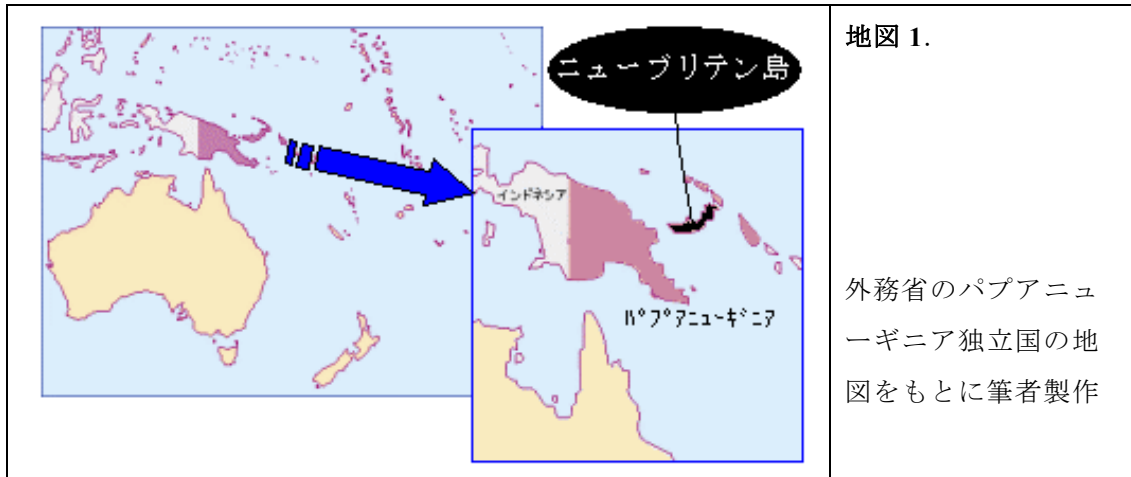
怠惰を克服するために死すとも、怠惰と妥協して生き長らへるよりはましである。まし所ではない崇高である²⁴。

上に引用した水木の言葉は、人間本来の生存欲求と当時の「公」との葛藤を意味するのみならず、「公」の優位を自己に納得させようとする水木の激しい努力を示すものである。

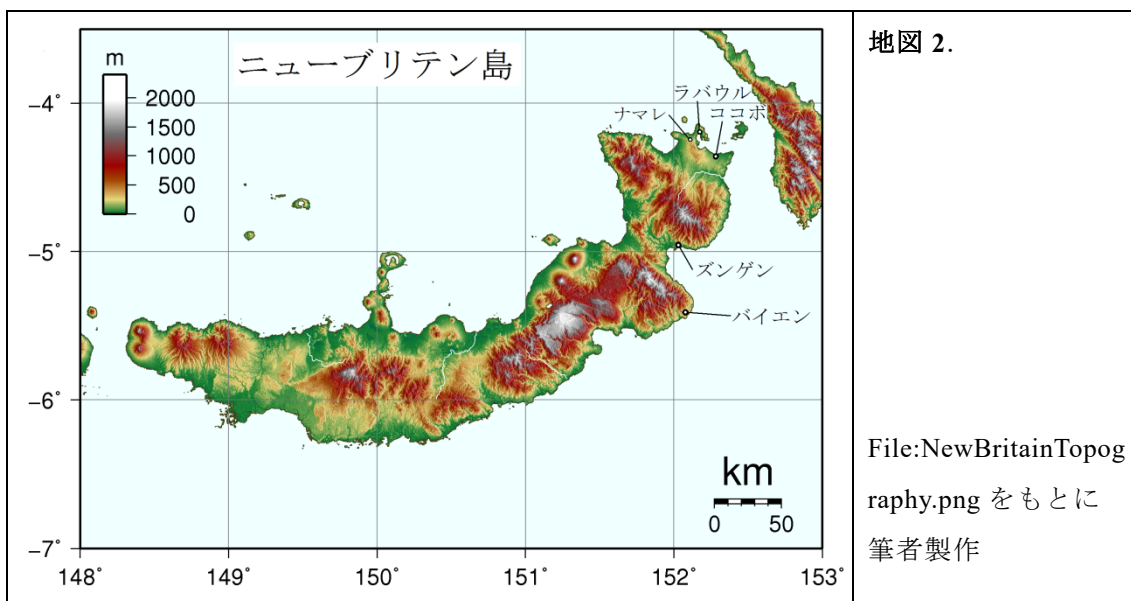
3-2 南方最前線経験：陸軍第38師団ズンゲン支隊

水木は1942（昭和17）年、20歳で応召、鳥取連隊に入営、翌1943（昭和18）年の秋、帝国陸軍第38師団の一員として南方戦線ニューブリテン島に送られている（地図1）²⁵。同島南部は既に豪州軍の支配下にあり、日本軍は同島北部で、陸海軍司令部、飛行場のあ

るラバウル (Rabaul) を守備すべく、水木らはラバウル (司令部) の南東約 30 km のココボ (Kokopo) に上陸、約 400 人 (ズンゲン支隊) は南の前線ズンゲン (Zungen) に派遣された。水木は、バイエン分遣隊としてそこから更に豪州軍に最接近した最前線バイエン (Baien) に向かった (地図 2)。



参考 < http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/bn_t_no39.html > (2014.4.8.閲覧)



参考 < <http://wikitravel.org/upload/shared//2/2c/NewBritainTopography.png> > (2014.4.8.閲覧)

水木の話では、敵襲により分遣隊は水木以外全員戦死、中隊に帰還するもそこで爆撃により左腕を失い、更に「みんな死んだからお前も死ね」と自決を強要される²⁶。加えて、師団司令部は、既にズンゲン支隊全員「玉砕」を大本営に報告していたために、辻褄を合わせるべく、ズンゲン支隊に玉砕を強いたのである²⁷。水木はその後マラリアを発症し、以降同島ラバウル周辺で再発を繰り返す。1945 (昭和 20) 年、同島のナマレ (Namaray) にて終戦を迎え、翌 1956 (昭和 21) 年 3 月復員。時に水木 24 歳であった。

水木の戦争体験に於いて特異な点はナマレ滞在中の原住民族トライ族との交流であるが、それ以前に、水木はニューブリテン島に上陸するや、暇を見つけては原住民「カイカ族」の集落を訪問し「トモダチになっ」ている²⁸。水木は上陸間も無い当時を回想し、「ノンキな旅行者」に近い気持ちだった、「とにかく、毎日面白いのだ。……要するに、ものめずらしいというのが“喜び”なのだナ」と書いている²⁹。水木はその後、同島の最前線のズンゲン、更にはバイエンへと派遣されたのであるが、その行軍中の気分を、「ジャングルもなぜか“死”のにおいがするような気がして、なんとなく浮き浮きできない」と書きつつも、蝶や鳥、緑の美しさを絶賛、最前列を行軍する気分を「前に人がいないだけで、木の葉の色も花の色もぜんぜん違い、さらに素晴らしく感じる」、「半ば天国気分だった」と回想している³⁰。左腕を失った後、ラバウルの洞窟の野戦病院を抜けだし、「現地人の村」を「天国が待ちうけているような気持ちで」探していた際の自然描写が次の図である³¹。曰く、「虫はうたい／たくさんの／鳥が舞って／いた…」(図6)³²。他にも、戦地ニューブリテン島ラバウル周辺、ナマレのトライ族の集落に於ける描写は、際立って楽園化されている。小鳥がさえずり、花が咲き、食物が豊かにあり、大酋長に椅子をすすめられ食物をほおぼる水木の満足な様子が描かれている(図7)。また、人々は愛嬌ある表情をしており、殊に「高床式の家に住む花嫁のエプペは美人で」、水木は「十五、六歳だった」と回想しているが、ユーモラスな人物描写の水木作品の中で際立って美しく描かれている(図8)³³。水木はインタビューの際この点を指摘され、軍隊には女性がいなかったため、エプペが「余計にキレイに見えたのかもわからん」と答えている³⁴。



図6.
マナレ付近

水木しげる (2005) 『完全版水木しげる伝(中)』講談社 p.291

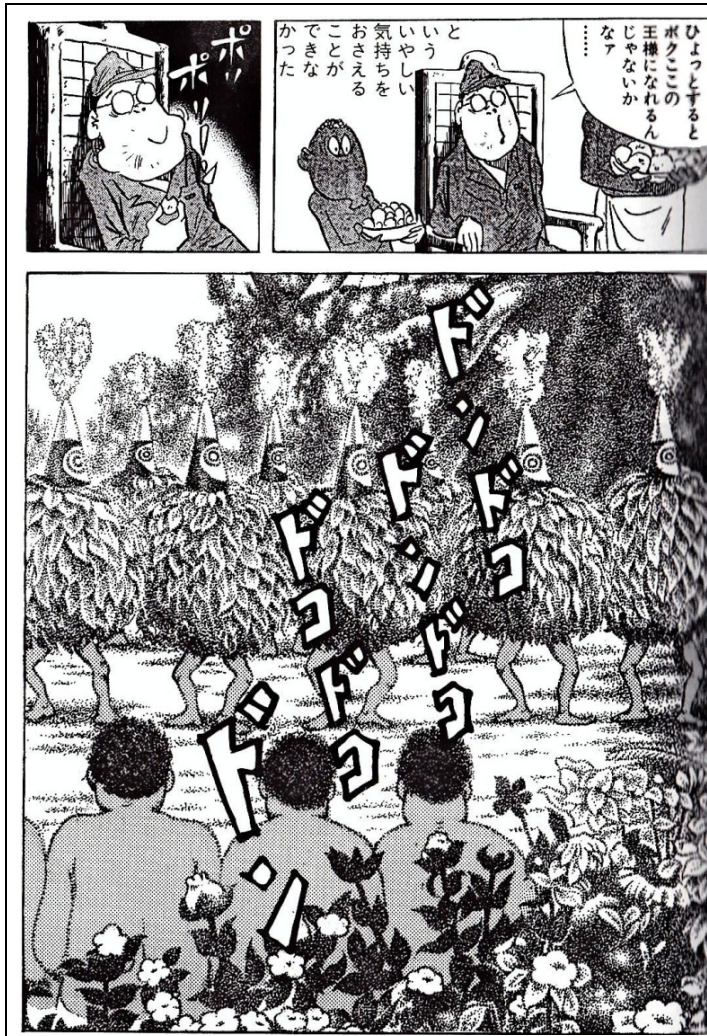


図 7.
トライ族の集落

大酋長にすすめられた椅子に座り、シンシン（舞踊）を見物する水木

水木しげる (2005) 『完全版水木しげる伝 (中)』講談社 p.331

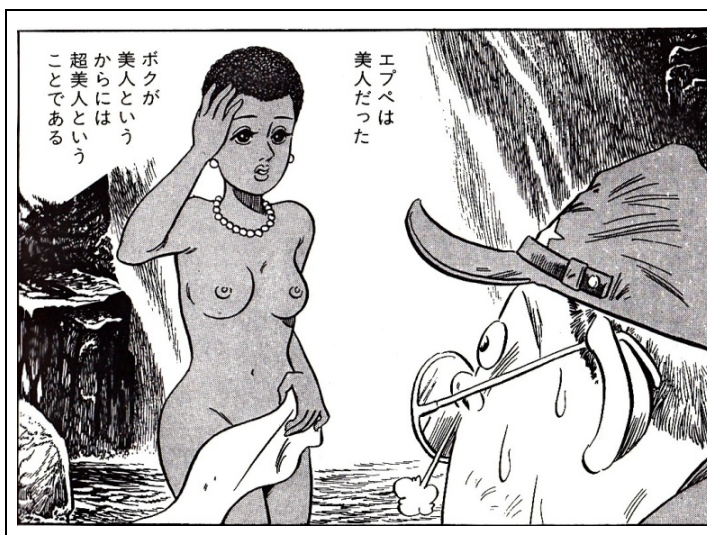


図 8.
「美人」エブペ

水木しげる (2005) 『完全版水木しげる伝 (中)』講談社 p.342

水木のトライ族の集落訪問までの軍隊経験に於いて、特に注意を払いたい点が二点ある。第一点は、水木が初年兵であり、前線に補充が来ず、終戦まで最下級兵であったのに加え、

特異な性格故に人一倍上官に殴られていた点である。第二点は、バイエンで唯一生き残ったにもかかわらず、中隊に帰還するや自決を命令された点である。水木は「それ以来、どうも、中隊長も軍隊も理解できなくなった。同時にはげしい怒りがこみ上げてくるのを、どうすることもできなかった」と書いている³⁵。また、2010（平成22）年、インタビューに答え、常に殴られる故に殴られないようにする事のみを考えるようになり、他の事に思考が及ばなくなったと証言している³⁶。自決命令については憤懣やるかたなく、「死ねっと言うわけですよ、死ねっ」と何度も反復し、「ばかばかしくて。だから、命令は聞いたけど、だまって生きていた」と述べている³⁷。筆者は、この特筆すべき二点が水木独特の戦争観、或いは人生観の基礎を形成すると考える。

軍隊内では、重労働に加え食糧不足が常態化、更に最下級の初年兵たる水木は毎日理不尽な扱いを受ける。一方トライ族の集落では自給分の労働以外は無く、バナナ、パパイヤ、芋など、食糧が必要十分量入手可能である。また、軍隊ではバイエンから一人中隊に生還するや自決を迫られ、自らの存在意義を否定されたのに対し、トライ族からは住居や畑の提供を申し出られ永住を求められる。即ち、「美人」エプペを見た時と同様に、軍隊内と軍隊外のトライ族社会の差異が、水木を以てトライ族社会を一層楽園化させたものと推測し得る。しかし、作品化された楽園の背後には水木の壮絶な体験に基づいた強烈な生への執念が認められるのである。

4 終戦後の生活と最初の戦時回想

水木は終戦にあたり、軍医砂原勝巳氏に現地除隊を相談するが、左腕の再手術の必要性等の同氏の説得で復員を決断する。トライ族の「同胞」には七年後の再会を約束し帰還船に乗る。復員後はヤミ屋、街頭募金、魚屋、リntax貸し、アパート経営を経て、1951（昭和26）年紙芝居作家となり、1954（昭和29）年、後の代表作『ゲゲゲの鬼太郎』の前身『空手鬼太郎』（後に『墓場鬼太郎』）を描いている³⁸。時に水木31歳である。

1954（昭和29）年は、日本経済が後に「高度経済成長期」と呼称される時期に入り、労働力は大規模産業に吸収されるようになる。これに従い、子供相手の駄菓子販売の客寄せであった紙芝居の演者も減少したと水木は言う。加えて、前年1月に発売された国産テレビの普及が紙芝居衰退に拍車をかけたのである³⁹。

水木は、1958（昭和33）年に紙芝居作家から貸本漫画家に転じ、1960（昭和35）年、『墓場鬼太郎』の貸本版を発表している。しかし、経済的な困窮は続き、水木は敗戦国の社会の片隅で貧困生活を送っていた。水木にとり、トライ族の集落を再訪することなど全く不可能な経済状態であった。

この貧困時代の比較的初期にあたる1949（昭和24）年から1951（昭和26）年頃、水木は「発表するあてもなく」『ラバウル戦記』を描いている⁴⁰。これは、後に発表される自伝

的漫画作品の原初的作品と言えるが、当該作品に描かれた「土人の家」には、落花生、と
もろこし、芋類などの食糧が干されており、火を焚き、湯を沸かす「土人パウル」の背後
には多くの果実が描かれている（図9、10）。貧困生活を送る水木の脳裏に、過酷な前線生
活の間に体験した原住民の、軍隊と比較すれば「天国のような」生活が思い起こされた
のであろう。水木は、軍隊での生活には一日でも楽な日は無いと断言し、『ラバウル戦記』
については、多々想像して描いた旨を以下のように語っている⁴¹。

思い出すとやっぱり懐かしいわけですね。だから余計いろいろ想像して描くわけ
ですよ。おもしろがって。まあそれにしても21年で死ぬってというのはあまりいい
事ではないですよ。生き延びようとするのは当然じゃないですか。やっ
ぱり25ぐらい（の将校）が命令するわけですから。思い出さないですね。やっ
ぱり避けて、避ける思い出かもしれんねえ。わたしなんかしょっちゅう殴られてい
たからねえ。あんまり思い出したくないわけです。毎日殴られるんですよ。

その一方、想像の楽園は理想化を深める。『ラバウル戦記』に描かれた「土人の家」と
「土人パウル」は、2001（平成13）年には一層豊かで朗らかな情景に漫画化されている（図
11、12）⁴²。



図9.
「土人の家」

水木しげる (2010)『水木しげる
のラバウル戦記』筑摩書房 p.48



図 10.
「土人パウル」

水木しげる (2010) 『水木しげる
のラバウル戦記』 筑摩書房 p.49



図 11.
漫画化された「土人の家」

水木しげる (2005) 『マンガ水木
しげる伝 (中)』 講談社 p.58

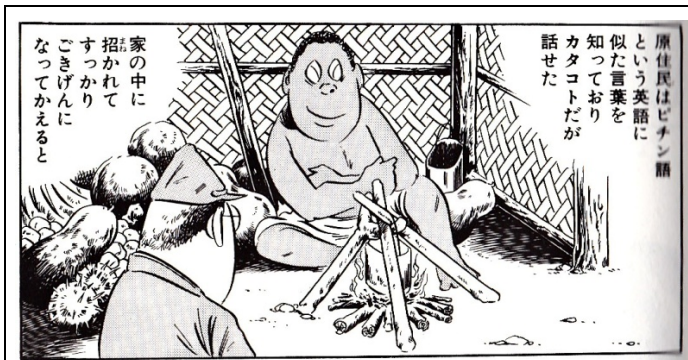


図 12.
漫画化された「土人パウル」

水木しげる (2005) 『マンガ水木
しげる伝 (中)』 講談社 p.59

5 鬼太郎

5-1 鬼太郎

水木しげるの代表作『ゲゲゲの鬼太郎』は、2018（平成30）年には6度目のアニメ化を果たしている⁴³。今日、「ゲゲゲ」は既に水木の代名詞になっているが、これはアニメ化の際に「墓場の」が不適当と考えた水木自身の手により「ゲゲゲの」と改められた⁴⁴。「ゲゲゲ」の由来は、水木が幼少時代に口がまわらず、自身を「ゲゲル」と称していた故に、周囲から「ゲゲ」と呼ばれていた事による。従って、『ゲゲゲの鬼太郎』は、『水木しげるのラバウル戦記』や『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』と同様、水木の世界観を書名に反映させたものと言えよう⁴⁵。以下本稿は、「鬼太郎」を通して水木の社会思想を考察するが、水木の思想を一層明確にすべく、『ゲゲゲの鬼太郎』のテレビ受けを意識する以前に発表された貸本漫画復刻版『墓場鬼太郎』を主要な研究材料とする。

主人公の鬼太郎は「幽霊族」の最後の生き残りの子として、死んだ母親の墓から出てきたという設定である。時代設定は発表当時の現代日本、即ち終戦から復興期の日本で、鬼太郎は子どもながら現実世界と異界を行き来できる特殊な能力を持つ。設定のユニークな点は、「幽霊」なる概念を、「大昔」「人間のいな／い時代から」「この地球に／住んでいた」「幽霊族」なる一種族とした点である⁴⁶。この設定は鬼太郎シリーズの根本であり、以降『ゲゲゲの鬼太郎』になっても、その初期には変更が無い⁴⁷。

5-2 鬼太郎に再現される楽園世界と水木の現実生活

水木作品にほぼ共通する特徴は「異界」の前提である。鬼太郎シリーズに於いて「異界」は、現実世界に異様な様相を呈する「楽園」として描かれる。即ち、現実世界の人間には理解し難い怪奇世界が、実は本質的な楽園として描かれるのである⁴⁸。その楽園のモチーフは、水木が戦争中に訪問した「土人の部落」、ニューブリテン島ナマレ、トライ族の集落である。⁴⁹ 水木が描いたトライ族の少女エトラリリの住む家（図12）は高床式で、『墓場鬼太郎』に描かれた大昔の幽霊族の家（図14）とは、その概念と大きさ、描かれた周囲の雰囲気と共通点を見出せるであろう。



図 13.
エトラリリの住む家

水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』
角川書店 p.132

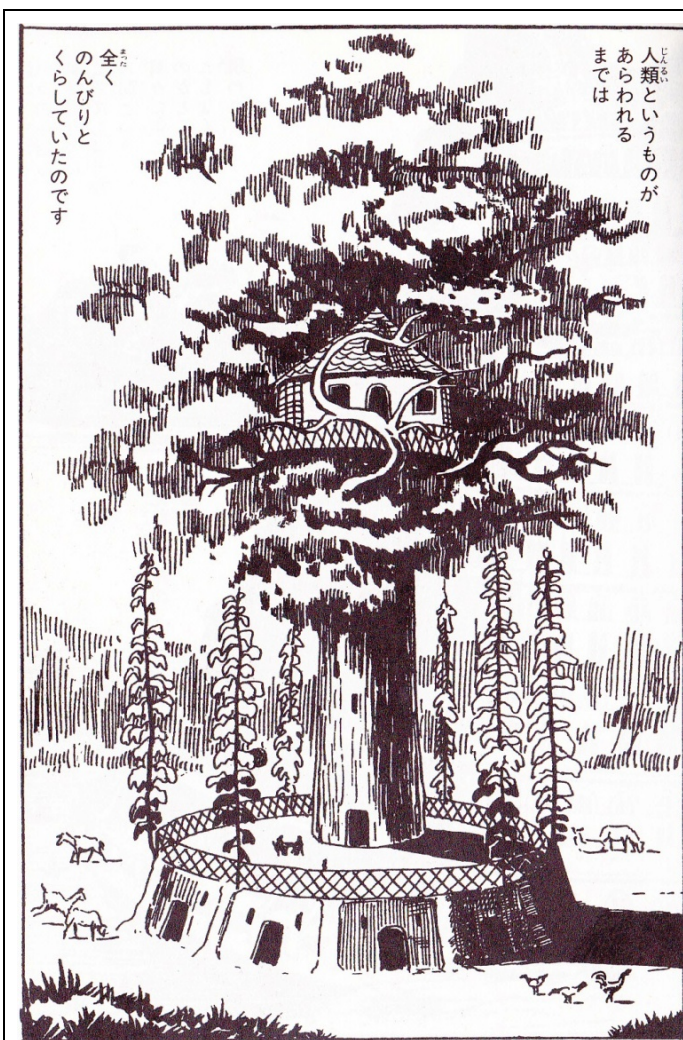


図 14.
大昔の幽霊族の家

後のアニメ化により「鬼太郎の家」として認知されるようになる。

水木しげる「幽霊一家」水木しげる (2007)『墓場鬼太郎①』角川書店 p.49

一方、水木の現実の生活は復員後の困窮生活である。水木は神戸の水木通りに中古アパートを購入するも借金返済に追われ売却して上京、その後アパートの借家住まいを繰り返

す。高額な家賃の支払いを無駄と考え、兄たちが西宮の家を売却した資金を頭金に充て、東京調布に自宅を購入したのは1959（昭和34）年という。それでも、1962（昭和37）年の段階で、「質屋の赤フダの厚さが3 cmにもなり電気料金も払えず蠟燭の下で仕事をするなど極貧生活を強いられ」ている⁵⁰。

5-3 日本人の「魂」と「血」

『墓場鬼太郎』に認められる楽園観には、復員後も変化無く続いているであろうと水木が信じ、理想化した、現実の日本社会或いは日本軍とは別の世界が投影されている。一方、水木が同作品内で批判するのは、現実の「文明」社会の負の部分である。即ち、水木が経験した理不尽な軍隊社会、戦後の貧困、重商主義、利益至上主義、等々である。

まず、『墓場鬼太郎』に於いて、状況設定にあたる冒頭作品「幽霊一家」に、戦後の米国型消費資本主義社会と戦前・戦中の権威主義社会に対する批判が込められている。「幽霊一家」第二話「生者と死者の間」の主要登場人物「水木」氏は銀行の調査係という設定であるが、その銀行が「血液銀行」なのである。「水木」氏は出社するなり「社長」（頭取）に呼ばれ、血液製剤に「幽霊の血」が混入したことを打ち明けられ、その調査を依頼される⁵¹。「幽霊の血」が混入した血液製剤を使用した患者が幽霊のようになってしまったというのである。

この状況設定から、後に明るみになる薬害エイズ事件を予見したかのような印象を受けるのは、筆者のみであろうか⁵²。実際、薬害エイズ訴訟の被告会社となった株式会社ミドリ十字の前身は「日本ブラッドバンク」、即ち「血液銀行」である。

事件の発端は、「幽霊族」の最後の生き残り夫婦が「不治の病にとりつかれ」、「生活に困って」「血を売った」というのである⁵³。当該事実を突き止め会社へ報告に帰ろうとする「水木」氏に、「幽霊族」の男は、「自分の職務さえ忠実に行えば／我々が絶滅しても／かまわないというの／ですか」と涙を流し訴える⁵⁴。筆者はこの訴えを、バイエンで全滅した部隊から唯一生還したにもかかわらず自決を命じられた水木自身の軍に対する怒りの声であるとする。水木は後年、自身の所属した支隊の指揮官、成瀬少佐を、若年で経験が浅く、ただ上層部の方針を忠実に実行しようとしたとして批難している⁵⁵。

水木が戦後日本社会の米国化を危惧していたことを示唆する作品は「あう時はいつも死人」の中の一話、「真夜中の出来事」である⁵⁶。鬼太郎は「タマシイ」を抜き取られ、「タマシイ」は夜叉により「ビニール製のしゃぼん玉」に閉じ込められ空に捨てられる⁵⁷。浮遊した「タマシイ」入りのシャボン玉は、偶然通りかかった飛行機内に取り込まれ、乗客として搭乗していた「禿山氏」に拾われる。この状況説明に於いて、日本人が「血」を米国に「売る」ことを示唆する表現が確認される。即ち、「日本血液銀行頭取禿山氏は／会社の製品に幽霊の血がま／じっていたことから日本で信用を落としなんとかアメ／リカに血液を輸出しようと／交渉に行き失敗してのかえ／りであった……………」⁵⁸。

水木が当該漫画作品に於いて意味する日本人の「血」とは、物理的血液や血統にあらず精神性を意味するのではなかろうか。即ち、上述のストーリー展開は、旧来の秩序が敗戦で崩壊し、個が浮遊し、日本人の精神性まで米国化しつつある日本社会に対する水木の警告と理解し得る。

6 水木しげるの戦争観

6-1 敗戦はみじめ

『墓場鬼太郎』に於いて、最初に戦争に関係する言葉が認められる個所は、「吸血鬼と猫娘」の中の一話「植物幽霊『吸血鬼』誕生」の一コマである⁵⁹。ニセ者の鬼太郎とそれに協力するねずみ男が鬼太郎のチャンチャンコを盗むべく謀議する。ねずみ男はニセ鬼太郎に窃盗を指南するにあたり、「作戦はチミツなほどよい」と言い、立ち居振る舞いの見本を示すのだが、そこに「敗戦はみじめだからな」と語りかける一コマ（図15）が挿入されている⁶⁰。チャンチャンコ奪取に失敗するとほんものの鬼太郎に逆襲される恐れがあるという意を大袈裟に表現した面白さがあるのだが、この一コマが必ずしも必要とは思われない。これは水木の敗戦に対する率直な一言であろう。



図 15.

「敗戦はみじめだからな」

水木しげる「吸血鬼と猫娘」水木しげる
(2007)『墓場鬼太郎②』、角川書店 p.112

次に「地獄の散歩道」の第二話「百時間のいのち」に注目したい⁶¹。その理由は、当該物語に『墓場鬼太郎』に於いて水木しげる本人以外唯一の実在人物、東條英機が実名登場し、その描写も『墓場鬼太郎』に於いては比較的に写実的であるからである（図16）⁶²。



図 16.
東条英機

水木しげる「地獄の散歩道」水木
しげる (2007)『墓場鬼太郎②』
角川書店 p.224

水木は鬼太郎の父である目玉親父に、「あれは東条英機さんか」と、さん付けで語らせている⁶³。作品中の東条（東条）は、ひたすら国民生活を心配しており、チョコレートやキャラメルが誰でも買えるようになったと聞くと、「私もそれを／きいて安心／しました」、「戦争はイケマセンよ」と言い去ってゆく⁶⁴。水木の東条描写には批判精神、或いは敵意のようなものは感じられない。寧ろ、東条に対する一定の理解、ないしは同情を示唆しているのではなかろうか。1991（平成3）年の「戦争と日本」に描かれた東条と比較すると、水木の東条観の変化が推察される（図 17）⁶⁵。



図 17.
1991 年の東条描写

水木しげる「戦争と日本」『小学
六年生』2月号、小学館 1991 年
2月1日、p.64

『墓場鬼太郎』に示唆される戦争観は、水木の敗戦認識を示しており、敗戦観と換言し

得る。そこで筆者は、水木の対連合軍戦争観を探るべく、1965（昭和40）年貸本漫画として発表された作品「地獄」に注目する⁶⁶。同作品は1970（昭和45）年に「コロポックルの枕」としてリメイク、再発表されているが、絵の構成やネーム（台詞）、作品構成はほぼ同じである。同作品には、水木の「太平洋戦争」観が示唆されている。

当該作品のあらすじは以下の通りである。

日本上空に出現した惑星の正体を解き明かすと、それは地球に危機が迫った事を知らせる「警備星」であったのだが、謎解きの段階で、北海道大雪山で発掘された10億年前の石が登場する。「石」とは、その石（鉱物）で製作された枕と、同じくその石で制作された「足の裏のようなロケット」である。石の枕とロケットの正体は、高度な技術を持った10億年前の「第一期人類」が滅亡の前にその歴史を後世に伝えるべく残した、脳波を介して情報伝達する枕型の本と、地球脱出用のロケットであったというのだ。現代（1960年当時）と10億年前、地球と宇宙を描いた壮大なSFであるが、「第一期人類」の滅亡の原因が、宇宙戦争と無条件降伏、降伏後の虐殺にあるのである。同作品の状況説明のくだりを引用する。

十億年前……………／太陽系宇宙は地球の中心／として文化が栄えていた（一行空き）だが／銀河系宇宙全域を支配／する強大な帝国と／戦端を開き 太陽系帝国は／敗れた。完全な無条件降伏／である…そしていま地球／占領軍が進駐してきたのだ⁶⁷

注目したい点は、水木が地球対宇宙（の惑星）或いは地球人对宇宙人（ないし地球外生物）の戦争と設定せず、「太陽系帝国」対「銀河系宇宙全域を支配する強大な帝国」とし、帝国主義の戦争とした点である⁶⁸。「太陽系帝国」には「天照大神の末裔たる天皇が統治するところの帝国」なる含意が存すると推定し得る。

北海道の「発掘現場」には、二十年間掘った残土が富士山のように積み上げられている（図18、上）。更に、発掘された「足の裏のような」形状のロケットには菊花御紋章のようなもの一ハッチである事が後コマで明示される一が描かれている（図18、下）。これらの絵は、日本の国土と「天皇制」国家を表象し得、上述の推定を補強する⁶⁹。

従って、水木の「太平洋戦争」観は、アジア・太平洋戦争を帝国主義の戦争と見做すものと言い得、その意味に於いて、アメリカを正義とするような戦争観ではない。

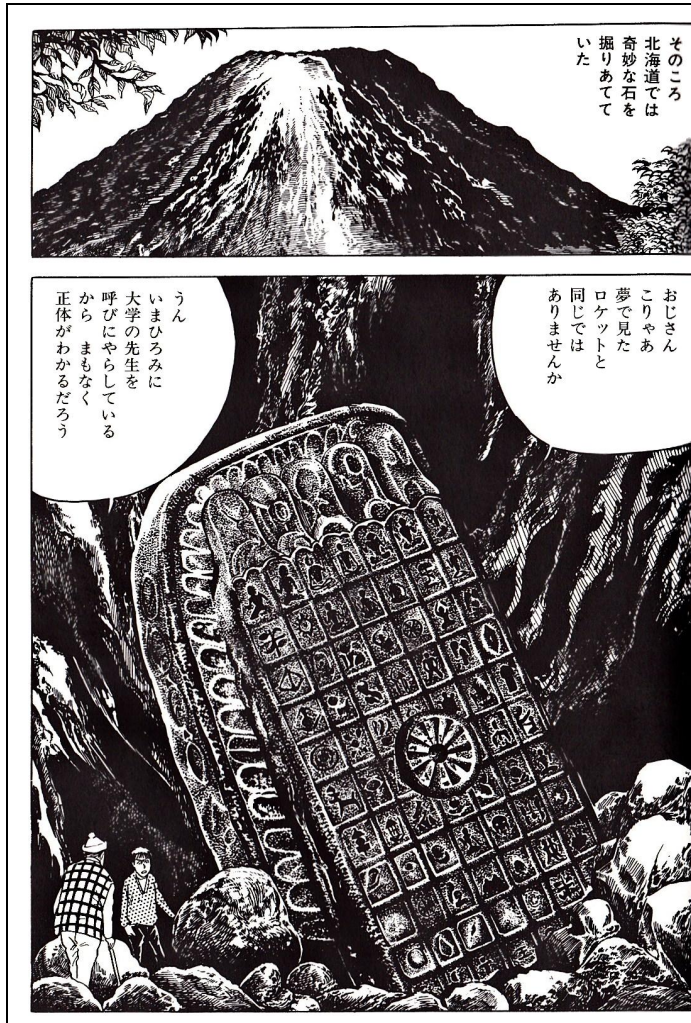


図 18.
発掘現場

上、残土を積み上げた山
下、出土したロケット

水木しげる「コロポックルの枕、」水木しげる (1996)『異界への旅 1』中央公論社 p.161 70

6-2 宇宙人と鬼

水木しげるの漫画作品「地獄」に於いて、地球の「第一期人類」は「銀河系宇宙全域を支配する強大な帝国」の宇宙人に残虐に殺される⁷¹。ある者は生きたまま食され、ある者は切り刻まれ、干物にされ、コロッケにされる。水木は「地獄」に於いて後年の「コロポックルの枕」ではカットされる程に残虐な絵を連ねる⁷²。しかし興味深い事に、宇宙人の描写がユーモラスで人間的なのである。本節では、絵の明瞭さを考慮し、図は「コロポックルの枕」より転載するが、コマ内の構図、キャラクター・デザイン、台詞、構成など、「地獄」と「コロポックルの枕」はほぼ同一である。

当該作品に描かれた宇宙人は、地球人の四倍程度の大きさであるが人間同様の形状である。角と牙を持つものの、筋肉質の肉体に、短パンもどきの腰巻、マントを連想させるスカーフのようなものを着用した姿で、脚には脛毛まで描かれている。その容姿は「覆面レスラー」や秋田県の「なまはげ」としても通用しそうな程人間的である (図 19)。このような宇宙人描写は水木が「太平洋戦争」を同類の殺戮と看做す暗示ではなかろうか。



図 19.

銀河系宇宙全域を支配する強大な帝国から来た宇宙人

水木しげる「コロポックルの枕」水木しげる (1996)『異界への旅 1』中央公論社 p.186

ユーモラスな宇宙人描写は、民間伝承に描かれる鬼と共通点が見出し得る。図 19 に描かれた宇宙人が手にする武器は金棒とミリタリー・フォークであり、同図下、左端の宇宙人の腰巻きは縞模様である。縞模様の腰巻きは、現代の絵本ではパンツ化されており、鬼の象徴のひとつと言えるが、その原型は虎皮の褌である。鬼の着衣に留意して調査すると、1777 (安永 6) 年の作と推定される『桃太郎昔話』に描かれた鬼の衣服は、大将は鎧、手下の鬼は長着 (長襦袢か?) を着用しており、下級と思しき鬼は上半身裸でスカーフらしきものを纏っている (図 20)。

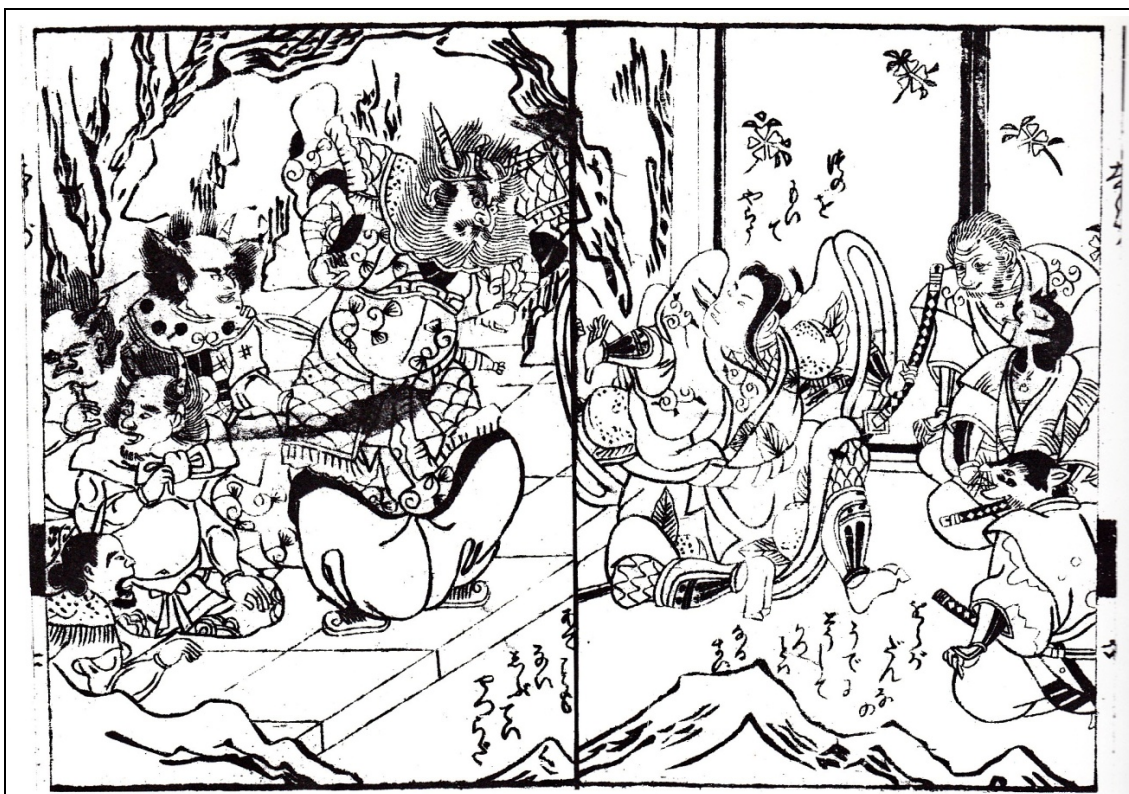


図 20.

江戸時代の桃太郎と犬、猿、雉（画像右）と鬼たち（画像左）

画像左、後ろに振り返りぎみの鬼の容姿に水木作品との共通点が認められる。

小池正胤・叢の会（1989）『江戸の絵本Ⅳ』国書刊行会 p.17

一方、1935（昭和 10）年から 1945（昭和 20）年に出版された講談社の絵本『桃太郎』には、スカーフらしき首巻に虎皮の褌姿の鬼が描かれている（図 21）⁷³。加えて、顔の表情、筋肉質の肉体、体毛など細部の描き込みに水木作品との共通点を多分に見出し得る。武士田忠は桃太郎が「戦前の軍国主義の下では、鬼畜米英を征伐する正義の子として描かれた」点を指摘するとともに、講談社の絵本『桃太郎』が今日的桃太郎のイメージの原型になった点を指摘している⁷⁴。民間伝承の鬼のモデルとして西洋人（南蛮人）のイメージが多分に認められ、戦前・戦中は「鬼畜米英」のスローガンと共に、米英人は鬼に見立てられた（図 22、23）⁷⁵。



図 21.

齋藤五百枝画、『桃太郎』の鬼

文章は現代向けに改変されている。

齋藤五百枝画・千葉幹夫文 (2001) 『桃太郎』講談社 p.30 - 31



図 22.

戦時漫画

桃太郎の羽織の襟には「世界一」、犬が持つ幟旗には「大東亜共栄圏樹立」と書かれている。

ジョン・ダワー (2010) 『容赦なき戦争』
平凡社 p.344 出典表示無し



図 23.

戦時ポスター

移動画（米鬼英獣）第28号 20枚1組（その2）

昭和19年4月25日発行 日本移動展協会

Museum of World War Two Boston 所蔵、提供

『墓場鬼太郎』に示唆される水木の戦争観には、二等兵かつ初年兵であった水木のやり場の無い怒りと同時に既存の社会や状況、組織に対する諦観が示唆されている。しかし、水木の「太平洋戦争」観は、当該戦争を帝国主義の戦いと看做していると考えて至当性が高い。帝国主義国家同士の戦争と理解する限りに於いては、日本のみが一方的に断罪される歴史観を、当該作品が発表された1965（昭和40）年当時の水木が了承したとは考え難い。何故なら、水木は「銀河系宇宙全域を支配する強大な帝国」の宇宙人を一方的に残虐に仕立てているからである⁷⁶。水木が連合軍の残虐行為に対して沈黙するとは考え難い。しかし、戦争を一般化した時、それは水木にとり「地獄」と命名されるべき世界であったに相違ない。

7 テレビの時代と批判精神

7-1 大衆視点と社会批判

一方、「地獄の散歩道」第四話「黄金の恐喝」では冒頭から水木の批判精神が発揮されている。ねずみ男がテレビ討論会に出演するという設定であるが、冒頭の三コマには連続してテレビが中央に描かれるとともに、その最初の二コマはスペースの約半分が活字に占られ、退屈な雰囲気が演出されている（図 24）。

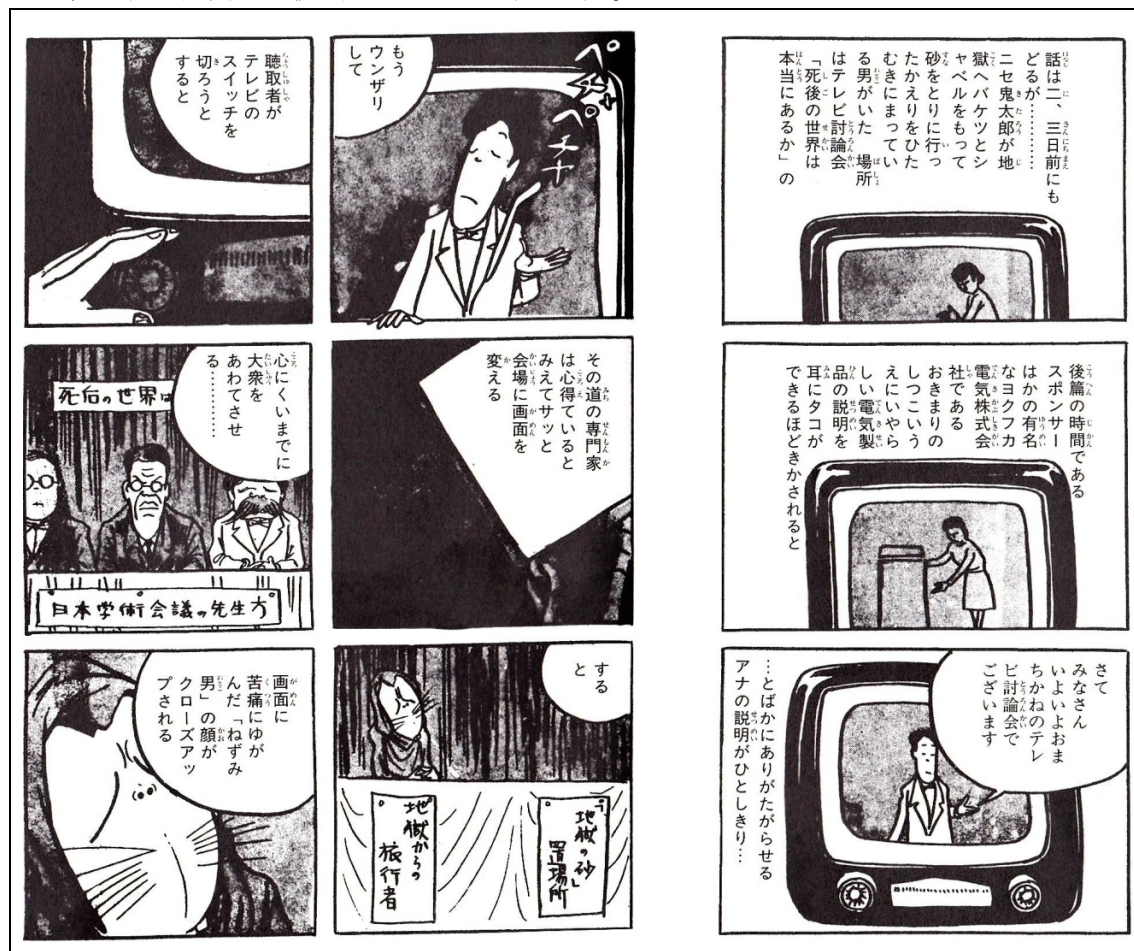


图 24.

電気（電器）製品のテレビコマーシャルと番組構成の風刺

水木しげる「地獄の散歩道」 水木しげる（2007）『墓場鬼太郎②』角川書店 p.248 - 249

二コマ目に「スポンサーはかの有名／なフクヨカ／電気株式会／社である／おきまりの／しつこいう／えにいやら／しい電気／製品の説明を／耳にタコが／できるほどきかされると」、三コマ目に「さて／みなさんいよいよ…」 「…とばかりにありがたがらせる／アナの説明がひとしきり…」と続く⁷⁷。水木の批判対象がテレビを通じて大衆の購買意欲を煽る大企業、電気製品、そして大衆心理を操る放送会社であることは、次に続く、「もう

／ウンザリ／して」「スイッチを／切ろうと／すると」「サッと／会場に画面を／変える」「心にくいまでに／大衆を／あわてさせる」より明白であろう⁷⁸。水木の視点は大衆側の、抵抗する術を持たない一個人の側に立ったものである。

興味深い点は、大衆の対極として、フランク永井をデフォルメした「トランク永井」と美空ひばりをデフォルメした「大空ひばり」を作品にしたものがある点である⁷⁹。トランク永井は「吸血木」に寄生され苦悩する設定で、批判的表現は確認されない。一方、ひばりに対しては辛辣である。

「水神様が町へやってきた」の一話「恐怖の水玉」は、巨大な水玉が大空ひばりを飲み込み、やがて町も飲み込むというストーリー展開であるが、大空ひばり登場場面の導入は以下の文である⁸⁰。

死にかけている漫画家水木し／げるあたりがどうなろうと世／間は平穩無事なんだが 事も／あろうに日本中のミーハー族／の人気の的である大スター大／空ひばりの家に発生した⁸¹

また、大空ひばりの登場場面の冒頭は以下の如く活字のみで説明される。

庶民に猛烈なホコリをかけて／フォードが着く 場所は有名／なひばり御殿である／やがてけたたましくサイレン／がなりひびく中から大勢の女／中や男中がお迎えに出る す／るとゆるやかに大スターが車／からおりる⁸²

しかし、「大空ひばり」はこの回の冒頭のみに登場し、第二話に「ひばりちゃんのパンツ」が登場するも、水玉に飲み込まれる人間はひばりである必要性が認められない。人間や車を飲み込んだ水玉は、「やがて」「はるか西の方に姿を消して行った」のである⁸³。

水木の貧困生活に改善の兆しが現れたのは 1965 (昭和 40) 年前後である。前年に漫画雑誌『ガロ』が創刊され、水木もそこに作品を発表するようになったのである。同年 8 月から『週刊少年マガジン』で「墓場の鬼太郎」の連載が始まり、翌 1966 (昭和 41) 年には、テレビの中に自由に出入りする少年を描いた『テレビくん』で水木は講談社児童漫画賞を受賞する。

しかし、この頃、即ち昭和 40 年代 (1965～1974 年) の水木作品は個々の社会事象に対する批判よりも、社会全体に対する不満を表現する傾向が強い。例えば、1966 (昭和 41) 年発表の「猫又」は、猫を食してとり憑かれる話、「墓守虫」は、保険金詐欺を共謀した夫婦が「墓守虫」に食われて死ぬ話、「暑い日」は、「漫画家水木しげる」が散歩に出て締め切りに間に合わせるべく必死に働く墓石屋に遭遇するという「多忙物」、「木枯らし」は「茂」が「おじさん」の家で頭蓋骨を発見する話である。また、『テレビくん』は、貧

しくともけなげに生きる少年を励ます内容である。

1968（昭和43）年、『墓場の鬼太郎』が『ゲゲゲの鬼太郎』としてアニメ化されテレビ放映される。そこには水木による理想化された楽園が「お化け」の世界として再現される⁸⁴。『ゲゲゲの鬼太郎』の大ヒットにより水木は人気漫画家の地位を得るが、皮肉にも水木の理想とは裏腹の資本主義経済社会で多忙な日々を送る結果となる。水木曰く、押し入れの中に居た筈の「貧乏神が去って／福の神がとり憑いた」が、同時に妖怪「『いそがし』に／とり憑かれた」のである⁸⁵。

7-2 反米漫画作品

『ゲゲゲの鬼太郎』は水木しげるの代表作中の代表作であるが、アニメ化以降の『ゲゲゲの鬼太郎』を詳細に検討することは、本稿の目的から逸脱する恐れがある。アニメ化された鬼太郎は、児童向けの娯楽性が高いが故にヒットしたからである。水木自身、「鬼太郎を描いた頃からウソつくことが上手になった…すなわち、ウソで食えるようになったわけですよ」と告白している⁸⁶。

しかし、小林よしのり『戦争論』批判を念頭に、水木の『鬼太郎のベトナム戦記』（以下『ベトナム戦記』）に触れておきたい⁸⁷。同書は鬼太郎がアニメ化された1968（昭和43）年の作品で、雑誌『宝石』が初出である。

『ベトナム戦記』は、ベトナムの村娘の至心な祈りに目を覚ました妖怪毛目玉が鬼太郎の父たる目玉おやじの従兄という設定で始まる。岩佐陽一によると、同作品は「佐々木守と福田善之という稀代の左翼系作家が原案に参加」したのであるが、鬼太郎ら妖怪団が現実世界に進行中のベトナム戦争に介入するという想像世界と現実世界のシンクロする構成は水木一流である⁸⁸。

『ベトナム戦記』はベトコンを支持する立場で描かれており、反米漫画作品であるが、思想的根拠は示唆されていない。水木自身、ベトナム戦争を良く理解していなかった旨を岩佐に告白している⁸⁹。しかし、水木の思想の一端として、戦後の米国追従の日本社会がある点は、鬼太郎が美女に魂をうばわれる第二話の状況説明文を読めば明らかであろう。即ち、「世の中はなんだってお金だ、お金さえあれば幸福だって買える、安全だって買えるんだ、というアメリカ式“魂金しぼり”の術に封じこめられていたため毛目玉が味方の敗北を知らせてきても動こうとしなかった」⁹⁰。

しかし、『ベトナム戦記』には、『ラバウル戦記』や他の戦記物に見られるような水木の激しい感情の発露を見出し難い。その一方で、娯楽性に関しては、戦闘場面に於いても現実的な限界が無視されている。例えば、霊鳥スィームルグが米軍機をつついで墜落させ（図25）、子なき爺は米海軍の原子力潜水艦の艦底に貼り付きこれを沈める。佐々木や福田の意図が何処にあれ、『ベトナム戦記』は戦争批判作品というより寧ろ反米作品と呼ぶべきであろう。米国帝国主義に立ち向かうアジアの弱小国を日本妖怪団が援助するストー

リー展開は、当時の日本人の屈折したプライドを刺激した作品なのではなかろうか。反米国型消費資本主義、反権威主義が『墓場の鬼太郎』と共通の基本思想にある点は疑いの余地が無い。

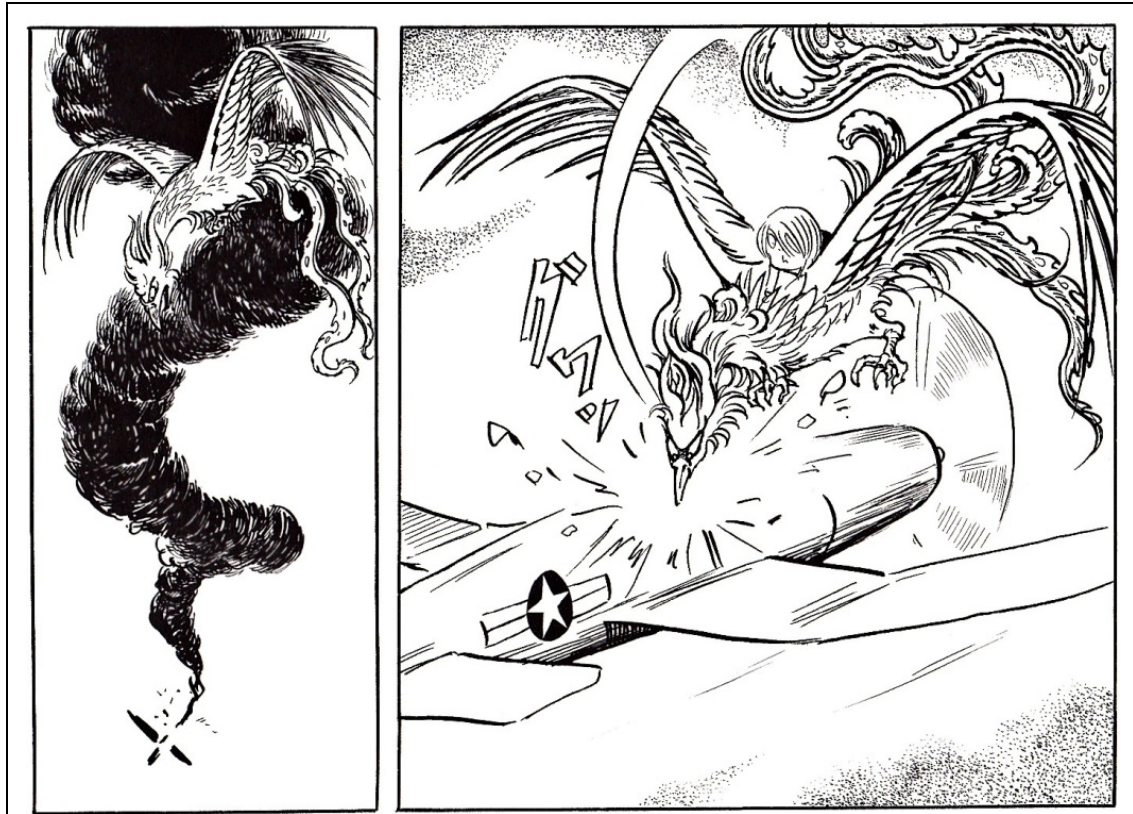


図 25.

空戦

霊鳥スィームルグ（ペルシャ神話上の怪鳥）に乗り米軍機を撃墜する鬼太郎
水木しげる（2010）『鬼太郎のベトナム戦記』徳間書店 p.24

7-3 公害問題

次に、水木が公害病問題を題材にした「ヘンラヘラヘラ」に注目したい⁹¹。同作品は 1971（昭和 46）年、漫画雑誌「希望の友」が初出である。「イテイイテイ病」の患者に薬を大量投与して殺害し、金槌で殴ると、コブから「ヘンラヘラヘラ」と笑う新生命が誕生するという内容で、批判対象は汚染物質を流出させる企業、製薬会社、加えて政府である。水木は病名を「イテイイテイ病」と書くが、漫画中の患者は「イタイイタイ」と叫んでおり、イタイイタイ病がモチーフたる事は明白である⁹²。当該作品、小林よしのりの薬害エイズ作品、ともに社会問題が主題であるが、「ヘンラヘラヘラ」は漫画作品として完結しており、小林作品のように現実社会に直接訴える政治手段とはなっていない。

まず、小林作品のタイトルが「HIV 訴訟を見て、プロの誇りについて考えた」、「エイ

ズの真相を暴く」、「薬害エイズ 個の連帯という幻想の運動」など、週刊誌のゴシップ調で、タイトルが作品内容を多分に示唆するのに対し、「ヘンラヘラヘラ」はその内容を示唆しない。次に、小林作品がノンフィクションで小林よしのり本人が登場しているのに対し、「ヘンラヘラヘラ」はフィクション化された作品で、水木本人は登場しない。小林がノンフィクションの中に娯楽性を分散した一方、水木はフィクション或いは娯楽の中に真実を分散したと言えよう。

当該作品の冒頭、医師と院長の会話に水木の批判精神が表出している。患者である少年金太の死亡を報告する医師に対し、院長は「ばかな人が／一人や二人／死んだからって／さわぐ人が／ありますか」と応じる⁹³。そして水木は保健医療制度を批判し、院長に「制度／だから／しかたが／ないよ」、「わしの病院／だけもうけない／なんてこと／できますか」と語らせている⁹⁴。筆者はこの最初と最後の発話を、水木のズンゲンに於ける体験に重ね以下のように読み変えたい。即ち、「兵卒が一人や二人死んだからって騒ぐ人がありますか」、「一人だけ（或いは分隊だけ、中隊だけ、支隊だけ）玉砕しないなんてこと認められますか」と。

「ヘンラヘラヘラ」の結末は、死んだ金太から誕生した新生命（これも金太）とその霊並びに両親の霊が「公害のない／あの世で／ノンキに／暮らしま／しょう」と手を携えて消えゆくのであるが、同作品の終盤で注目したいコマが、ラストシーンの一コマ前である（図 26）⁹⁵。



図 26.

「ヘンラヘラヘラ」

上右、霊となって自身の死体を発見した少年金太の両親
(の霊)

上左下、金太の両親の霊と新生物金太とその霊

下、両親の霊の間に新生物金太とその霊が見える

水木しげる「ヘンラヘラヘラ」水木しげる (1994)『異悦録』角川書店 p.278

水木は新生物金太の霊に「おれ／もいつ／しょに／かえるよ」と言わせている⁹⁶。帰るべき場所とは、公害が無く、呑気に暮らせる「あの世」なのである。水木の戦記物、伝記、そして一連の鬼太郎シリーズに表現された楽園観を踏襲すると、「あの世」は戦記物や伝記に描かれる南の国、トライ族の集落であり、鬼太郎シリーズに描かれる妖怪の世界と同義たることに頷けよう。

8 水木しげる「戦争論」と小林よしのり『戦争論』

作家・雨宮処凛は自著『14歳からの戦争リアル』執筆の為、水木に取材を申し込んだ。雨宮によると、マネージャーを通して水木本人が快諾したのだが、水木は雨宮の取材を前に2015(平成27)年11月他界した。

取材快諾時の強烈に印象づけられた言葉を、雨宮は次のように綴っている。

高齢のため、長時間の取材は受けられないなどのいくつかのことわりの言葉の後に、こんな文章が続いていた。「それと水木は『戦争反対』とは決して言いません

ん。そのために、記事をうまくまとめられない記者さんも過去にはおられました」
97。

水木のマネージャーとは水木の弟、幸夫氏である。幸夫氏は雨宮が水木に「戦争反対」の言葉を期待していると予測したと推察されよう。「水木は『戦争反対』とは決して言いません」⁹⁸。この言葉に真意推測の余地はあれ、水木プロダクションの公式意見と見做すべき重い言葉である⁹⁹。

水木しげるにとり（水木に限らず）、戦争が過酷な経験であったことは議論の余地が無かる。しかし、それ以上に、復員後の生活は水木の想像を上回る困難なものであった。加えて、1968（昭和43）年の『ゲゲゲの鬼太郎』テレビアニメ化以降は、一転して健康に影響を及ぼす程水木の生活は多忙なものとなった。このような流れの中で水木の記憶は純化されている。

水木の戦争観は「この世」と「あの世」に二極化された世界観の「この世」に内包されており、戦争自体、或いは戦争一般を直接的に否定していない。『墓場鬼太郎』に於いて、戦争自体に言及しているのは、本稿で取り上げた「地獄の散歩道」の第二話に登場する東條英機の発話のみである。即ち、「戦争は／イケマセンよ」で、「イケマセン」が片仮名表記であり、前後の関係からも強い言語表現ではない¹⁰⁰。また、2008（平成20）年6月放映のNHK番組「人生の歩き方」に於いては、「『戦争はしないほうがいい』というのは自然の声だと思いますよ」と語っており、完全否定の言葉ではない¹⁰¹。つまり、否定すべき戦争が属する「この世」は不条理だということである。従って、水木の反戦的表現は、「自然の声」と語られるように、人間として当然の戦争否定であり、生を阻害するものは何であれ避けるべしとの意味が示唆されていると言える。

水木の戦争観とは、主としてアジア・太平洋戦争に関するものであるが、水木が鬼太郎を描く以上、戦争自体を完全否定する事は困難であろう。何故ならば、鬼太郎シリーズの基本構成は邪悪な妖怪と鬼太郎との対決であり、後年に至る程に善悪、並びに戦闘要素が明確化しているからである。鬼太郎が正義の味方に位置付けられる事により、アニメ版の人气が一層高まったのである。

しかし、水木程過酷な戦争経験をした現役漫画家を筆者は知見しない¹⁰²。その水木が、小林よしのり『戦争論』を自身の漫画作品の題材としている点は興味深く、その意見は説得力を持つであろう（図27）。



水木による小林よしのり『戦争論』批判の漫画作品のタイトルは「戦争論」で、水木晩年の戦争観と『戦争論』に対する率直な感想をエッセイ風に描いている¹⁰³。水木の「戦争論」は、エッセイ・コミック、『カランコロン漂泊記』として発表され、後に教育史料出版会から出版された『戦争論妄想論』に所収されるが、いわゆる小林作品批判や小林よしのり批難とは一線を画した作品である。

水木は、小林の『戦争論』で「長い間／忘れていた／あの時代を／思い出した」、そして戦争当時の勇ましい雰囲気を回想し、「なんとなく／キモチが／いいんだ」と書いている¹⁰⁴。水木はその雰囲気を再現し、『戦争論』の読後感を、率直に「とても／楽しかった」、「ふと／あの／戦前の……／勇ましさを／思い出し、／非常に／なつかし／かったが…」と書くが、当時の軍隊内の日常的暴力も思い出し、不安感も書いている¹⁰⁵。そして、その不安感は「きっと／年のせい／だろう」と書き、当該作品は内省的に終わっている¹⁰⁶。

水木の「戦争論」には、水木が戦争当時を懐古したという事実のみが描かれている。しかし、水木の戦争観は厭戦・避戦観に他ならず、敗戦時の安堵感は既に漫画化されており、活字本「私の履歴書」にも「感無量だった」と書かれている¹⁰⁷。

小熊英二は、前線にいた兵士たちが敗戦を迎えたときの率直な安堵感と、「戦中派」知識人でも、陸軍の見習士官であった山田宗睦と南方戦線に徴用されていた鶴見俊輔の戦争観の差異を指摘している¹⁰⁸。しかし、戦時中 20 歳前後の軍人、軍属、準軍属など戦争経験者が、後年に至り戦争当時を懐古する心情は、程度の差こそあれ、価値観を超越した一種の共通心理ではなかろうか。それは、当時の社会情勢故に、本人の意思にかかわらず青春の一時期を、生命を賭した戦争に捧げたのであるから、自己の人生を懐古しようとすれば戦争を懐古せざるを得ないのである。

「戦中派」知識人、吉本隆明にせよ、小林よしのりの戦争観には同意するところが多い。吉本は戦争中の気分の高揚を告白し、その明るさを、「病的」、「不健康」としつつも「社

会全体の雰囲気は、ものすごく明るく、そして建設的」であって「『戦争中は世の中は暗かった』というのは、戦後左翼や戦後民主主義者の大ウソ」と断言している¹⁰⁹。

水木の「戦争論」は戦争体験世代、殊に戦中派と呼ばれた世代の率直な感想を代表した漫画作品である。水木しげるの「戦争論」は、小林よしのりの『戦争論』の「爽快感」を批判するにあたり、戦争体験世代の人生懐古なる視点の重要性を認識させるものである¹¹⁰。

9 結論

本稿で論じてきた水木しげるの思想内に対立する概念としては、森林対都市、農耕対工業、原始社会対現代社会が挙げられよう。前者の代表は、水木作品に理想化して描かれた、ニューブリテン島トライ族の集落であり、後者はいずれも水木流に表現すれば、近代化が進み妖怪の住めない環境である。

現実問題として、トライ族の集落も近代化を免れず、水木は戦後訪問を重ねる毎に失望感を深めるのである¹¹¹。

実際に水木が体験した事実は、トライ族の素朴な生活と近代国民国家の軍隊生活、復員直前の現地での農耕自給生活と戦後復興期の多忙生活として漫画作品に描かれている。即ち、水木思想内の対立概念は、ほぼ時間的に併存していたものである。それは横軸に展開される世界であり、水木の世界観は垂直方向に断絶傾向にあると言えよう。水木作品には縦軸概念が希薄である。しかし、晩年の水木の「楽園」への憧憬は日本の古代へと向かい、2012（平成24）年には出雲神話を題材にした漫画作品『水木しげるの古代出雲』を発表している¹¹²。また、水木は島根県隠岐に伝承する武良祭りには高齢を押して出席し、先祖との繋がりを感じているのであるが、水木の漫画作品に於ける両親、亮一氏、琴江氏との関係描写、祖父母との関係描写は淡白である¹¹³。

水木は昭和史を総括し、「『もう戦争は／してはいけない』という／大きな教訓の／歴史」と書いている¹¹⁴。『コミック昭和史』は、後ろから数え8コマから7コマに鎧武者の合戦、最終コマに銃身を結んだ歩兵銃を軍旗の前で交叉させた絵を配置して完結している（図28）。この構成と前述の「もう戦争はしてはいけない」は、1989（平成元）年、水木の『コミック昭和史』執筆当時の総体的戦争観と看做し得る¹¹⁵。加えて、水木は文庫版へのあとがきに於いて「太平洋戦争」の戦死者を「犬死にした多くの人々」とし、その魂が作品を描かせると書いている¹¹⁶。水木の念頭にある戦死者とは、主として南方戦線、殊にニューブリテン島に於ける日本軍の戦死者を指すと推定し得るが、同じ「戦中派」でも、特攻を「無駄死に」と看做す事に怒りを隠さぬ作家吉本隆明とは対照的である¹¹⁷。

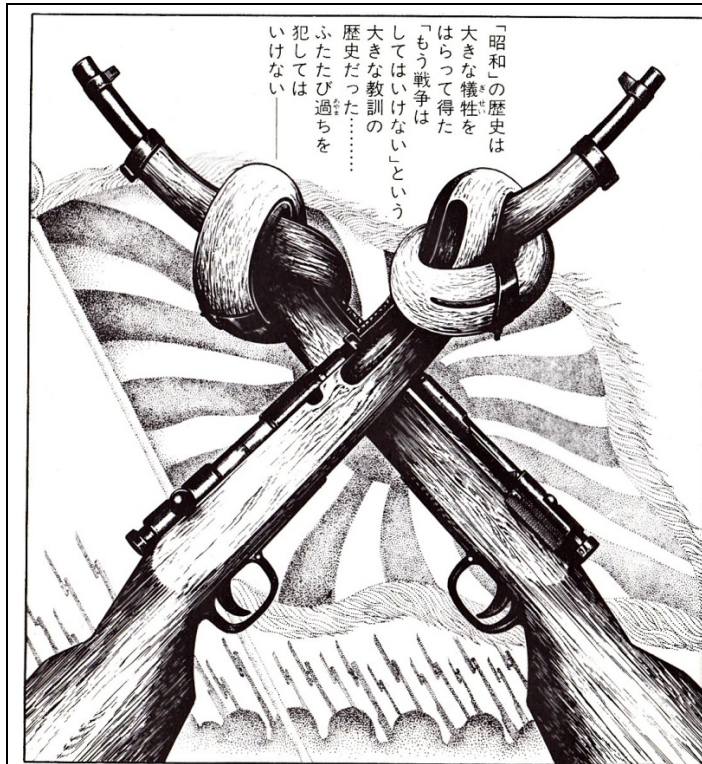


図 28.

『コミック昭和史』最終コマ

水木しげる (2004) 『コミック
昭和史 8』講談社 p.269

しかし、前述のように水木は「『戦争反対』とは決して言」わない¹¹⁸。水木が小林の『戦争論』を批判しきれない理由は、水木の持つ個人主義と強者生存の現実に対する虚無主義的抵抗にあるのではなかろうか。それが単にエゴイズムを認める開き直った言説であれば、吉本隆明の持つ痛快さに通じるものがあるだろう。しかし、水木のそれは成人男性としては精神異常を疑われる程に自己の好奇心に純粹に従うものであった¹¹⁹。呉智英との対談では、水木は少年期に自分がいじめに加担した生徒が転校しても、何も感じる事がなかった理由を「ドライな子供だった」からと述べている¹²⁰。つまり、結果に対する「ドライさ」が水木作品の面白さの一つであるのだ。呉智英は水木作品を「朗らかなニヒリズム」と評している¹²¹。

「朗らかな」と評されるところが水木一流であるが、水木思想の特徴として筆者は水木の個人主義に加え、強者生存の論理を指摘したい。その理由は、水木が弱さを感染するものとして嫌悪しているからである。

まず漫画作品内ではあるが、水木は小学校四年生の頃、弟の幸夫氏が女子と話をしているところに通りかかり、「女なんかと／遊ぶな／弱さが／うつる／ぞ」と注意を与えている¹²²。活字書籍では、1977（昭和 52）年に発表した自叙伝『のんのんばあとオレ』に「オレは、ふだんは弱い者に手をかけたことはなかった。弱い者はかわいそうだからというのではなくて、弱い者に手をふれると弱さがうつるような気がしていたからだ」と書いている¹²³。更に同書には「手があたるだけで弱さがうつるような気がした」、「とくに女の子は、…触れるだけで、めめしさがうつるような気になった」と書いている¹²⁴。また、2003

(平成15)年には「私の履歴書」に、「弱い者いじめは大嫌いで、女の子にも優しくかった」と書くが、その理由を、「弱い者や女の子をいじめると、弱さやめめしさが感染するのではないかと恐れていたからだ」と書いている¹²⁵。活字書籍に反復して書いている水木の「弱さ感染」観は、事実と理解して良いのではなかろうか。

この特異な観念は強さに対する憧憬と一体のものであるが、それは水木の強烈で純粋な好奇心と結び付き、強者生存の論理として結実する。1996(平成8)年、呉智英との対談に於いて、水木は紙芝居と貸本業界の壊滅を乗り越えた経験を日露戦争に喩え、以下のように語っている¹²⁶。

水木：船が沈没する時、救命ボートのヘリを必死でつかむんですね。それかなあ。

呉：でも、つかめない人の方が多いでしょう。

水木：私はね、子供の頃から賢かった、周囲の人がバカだったんだ。

また、対談自体の娯楽性と、対談相手が水木旧知の呉智英たる点を考慮する必要があるものの、多くの戦友が死に、自分ひとりが生き残った事について「水木しげるは確信を込めて…『愉快になるんですよ』」とも言っている¹²⁷。この発言は、人の死を漫画化し娯楽に転換してきた水木しげるの漫画家としての本質的部分が期せずして吐露されたものではなかろうか。強者水木は「ゴーマニズム宣言」の小林よしのりのように尊大な自己を演出することなく、他人の死を虚無的に恰も風景の如く描写してしまうのである。水木自身、次女悦子氏が幼少期に近所の川に捨てられた仔猫を連れ帰った時を回想し、「生命というのは、結局愛情の水をやらないと育たない、ということに七十を前に初めて気付いた」と告白し、「長い間、貧乏神との戦いに熱中していたから、何も言わずに死んで行く『生命』のことなど、気付かなかった」と弁明しているのである¹²⁸。

この水木の、いわゆる「天然」の強者ぶりが水木作品の笑いの本質と言えよう。呉智英流に言えば、水木しげるこそ水木しげるの最高傑作なのである。しかし、水木は1996(平成8)年の「愉快になる」発言に至るまで、終戦直後には日本軍の勇姿を描き、ベトナム戦時には反米作品を描き、戦後民主主義下では、少なくとも一般的には、長らく反戦漫画家として理解されてきた。つまり、時流に乗ることにより戦後生き抜いたのである。それが「貧乏神との戦い」であった¹²⁹。

水木の虚無主義の根底には、当然として常識的反戦思想があろう。しかし、極限を体験した水木は、如何ほど反戦を唱えても抗し難いナショナリズムを熟知している。戦争、国家、天皇、上官などの概念を包摂した外郭概念、戦争に向かう可能性を常に秘めた社会に対し、水木は静かに警鐘を鳴らしている。しかしそれ以上に、強者水木は、戦争中も戦後も如何に理不尽な社会でも、強く生き抜くことの大切さを一層強く訴えているように思える。

水木は「戦争論」に於いて率直な『戦争論』の感想を述べているが、『コミック昭和史』に於いて見せたように反戦論を展開する事無く、同作品は忘却していた戦争当時を懐述する水木一流の虚無主義的表現で終わる。水木作品が社会派たるゆえんは、反文明、反権力、反重商主義を基本に社会を描写するからであるが、水木作品の特徴は虚無主義である。小林のように権威権力に正面から挑戦するのではない。静かな抵抗である。小林作品は強烈なエゴイズムを反語的表現手段とした「情」を基調としているのに対し、水木作品は「朗らかなニヒリズム」を表現手段とした「無情」が基調にあると言える。

1976（昭和 51）年に水木は、「天皇制ときくと／なんとなく薄気味／が悪くなる」と書いているが、1991（平成 3）年の紫綬褒章受章の際には燕尾服にシルクハット姿で無邪気に喜びを表現している¹³⁰。また、2011（平成 23）年 11 月、翌月のアジア・太平洋戦争開戦 70 周年を前に水木はインタビューに答え、以下のように語っている¹³¹。

やっぱり負け戦はしてはいかんですよ。だから“アメリカと一戦交えて勝つ自信があったのかなあ？”と思って。参謀本部はちょっとまちがっていた。アメリカと戦争してどうして勝てますか？そこの一番簡単なところがダメだった……勝つ戦争をしなくては¹³²。

更に、「天皇の戦争責任的な」心情の有無を問われた水木は「それはないですね」と答えるとともに、責任の所在を参謀本部に求め、「天皇制」に関する心境の変化を以下のよう語っている。

戦争中はすべて天皇の名で始められ、その名で殴られたから、やり場のない怒りをつい無意識に“天皇”という存在に向けていたんですが、それがなくなっただけです¹³³。

水木は出征前、死の恐怖と戦い、「公」に生きる崇高さを自らに説教した。ニューブリテン島に於ける激戦を生き抜いた水木は、アジア・太平洋戦争の「虚妄」を告発するも、戦争自体の直接否定は採用しない姿勢を一貫した。

晩年の水木は、インタビュー等を通し、公的にも自己の人生を回顧する機会が増加し、自己の経験した過酷な戦争に対しても人生回顧の視点で語る傾向が認められる。極限状態を体験した水木に於いてさえ、「終戦」から約 70 年の歳月を通し、戦争観、天皇観、人生観に変化が生じている。「生」は歳月には抗し得ず、ナショナリズムを包含する世の「無常」に水木自身が包摂されてゆくのである。水木作品は個人の力では抗し難いナショナリズムに対し、虚無主義を表現手段として抵抗していると言えよう¹³⁴。その思想は一言で「反戦」と表現し得るような単純なものではない。戦争はあまりに「ばかばかしく」、大衆は

馬鹿なのだ¹³⁵。水木は馬鹿馬鹿しく「反戦」を唱えることなく、「だまって生き」抜いたのである¹³⁶。

付記 本研究は2018年国際基督教大学大学院博士論文『小林よしのり「思想漫画」の特徴―「公論ナショナリズム」と娯楽』を構成する一章を大幅改定したものである。

注

- 1 小山昌宏 (2007)『戦後「日本マンガ」論争史』現代書館 pp.29-30
- 2 ローマン・ローゼンバウムは、小林よしのり『戦争論』及び『ゴーマニズム宣言』、並びに山野車輪『マンガ嫌韓流』を右翼的言論と批判しつつ、その対極に位置する反戦的主張として水木しげるの「戦争と日本」を例示している。「戦争と日本」は1991年、小学館の児童向け雑誌『小学六年生』2月号に発表された作品で、想定読者は小学校6年生である。Roman Rosenbaum 'Introduction: the representation of Japanese history in manga' Roman Rosenbaum "Manga and Representation of Japanese History" Routledge, 2013, Oxon, pp.1-17 (参考)。
- 3 水木の出生地を鳥取県境港と記す書籍が多数あるが、後年訂正される傾向にある。
- 4 水木しげる (2005)『完全版水木しげる伝 (上)』講談社、(2001年の初版『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』講談社)では、生後1箇月で境港高松町の祖父の家に帰郷、水木しげる (2004)『水木サンの幸福論』日本経済新聞社では、二歳ぐらいの時に、父の故郷である鳥取県境町入船町に帰った旨が記述されている。
- 5 水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』角川書店 p.9。
- 6 水木の自叙伝、水木しげる (1990)『のんのんばあとオレ』筑摩書房 (初版1977年)。同作は1991年にNHKでドラマ化、翌1992年には続編も放映され、文化芸術作品賞を受賞。漫画版『のんのんばあとオレ』はドラマと同年に出版されている。漫画版のフランス語訳は2007年、アングレーム国際マンガフェスティバルで作品大賞を受賞。
- 7 水木しげる (1999)『ねぼけ人生』(新装版)筑摩書房 p.23 (初版1982年)。
- 8 同上。
- 9 水木前掲『のんのんばあとオレ』p.11、水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』角川書店 p.34 (初版は水木しげる (2008)『神秘家水木しげる伝』角川書店)。
- 10 水木前掲『私はゲゲゲ』p.19。
- 11 前掲書 p.20。
- 12 前掲書 p.15。
- 13 水木前掲『ねぼけ人生』p.24。水木前掲『のんのんばあとオレ』にも同様の記述がある。
- 14 曹洞宗巨嶽山正福寺は鳥取県境港市中野町に所在、2002年には境内に水木しげる記念

- 碑が設置された。
- 15 水木前掲『私はゲゲゲ』p.40。
 - 16 水木前掲『完全版水木しげる伝（上）』p.45、水木しげる (2004)『コミック昭和史第1巻関東大震災～満州事変』講談社 p.60 他。薬師如来咒は、「おんころころせんたりまとうぎそわか」とも表記される。
 - 17 984（寛平6）年創開の臨済宗妙心寺派醫王山一畑寺（いちばたじ）は1953（昭和28）年創設の一畑薬師教団の総本山でもある。創建当初は天台宗（密教）に属した。島根県出雲市小境町に所在。
 - 18 水木しげる「わんぱく三兄弟、大いに語る」水木しげる (2004)『水木サンの幸福論』p.197。
 - 19 動機については、「海に落として殺してみようと思って」（水木前掲『完全版水木しげる伝（中）』所収の2004年インタビュー）、海岸の潮流の速いところが面白く感じ、「そこへ“人”を流したらさぞ面白いだろうと」（水木しげる (2010)『カラコロン漂流記』小学館）など、ニュアンスに微妙な差異が認められる。
 - 20 「松ちゃん」の死因は、はしか（『完全版水木しげる伝』）の他、疱瘡（『カラコロン漂流記』）、肺炎（「わんぱく三兄弟、大いに語る」）と記述されている。
 - 21 水木しげる「水木しげる出征手前手記」『新潮』2015年8月号、新潮社 pp.145-166。
 - 22 同上。
 - 23 同上。
 - 24 同上、p.161。
 - 25 ニューブリテン島は欧州各国の植民地を経て、第二次大戦中は日本が占領、主要都市ラバウルには海軍航空隊の基地が置かれた。第二次大戦後は豪州の統治下に置かれるが1975年独立、パプアニューギニア独立国の一部を形成する。尚、当時日本ではニューブリテン島を「ラバウル島」と呼称、また、日本軍はナマレやココボを含む同島北東部を「ラバウル地区」と呼称している。
 - 26 NHK 戦争証言アーカイブス「証言」所収「水木しげるさん」
 <http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001130006_00000>
 （2014.4.8 閲覧）。2010年4月28日収録のNHKのインタビューでは、人員を10名と証言、『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』では「人員は九人」と記述。
 - 27 澤邊邦雄氏は師団司令部の認識と驚きを証言している。NHK 前掲アーカイブス「澤邊邦雄さん」
 <http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001100607_00000>
 （2014.4.8 閲覧）。また山口政七氏は、師団司令部の「メンツに殺されたようなもの」と証言している。NHK 前掲アーカイブス「山口政七さん」
 <http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001100560_00000>

(2014.4.8 閲覧)。

- 28 水木しげる (2010)『水木しげるのラバウル戦記』筑摩書房。トライ族は「トーライ族」とも表記される。「カイカ族」については、水木は同書に、彼ら自身がそのように名乗った旨を記している。ナマレはラバウル所在の海軍司令部から南西約 9.6km の小集落。
- 29 水木前掲『水木しげるのラバウル戦記』 p.37。
- 30 筆者下線。水木前掲『水木しげるのラバウル戦記』 p.129。尚、派遣先の地名を水木しげる (2007)『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』河出書房では「ダエン」と表記されている。
- 31 水木前掲『完全版水木しげる伝(中)』 p.291、水木しげる (2004)『コミック昭和史第6巻終戦から朝鮮戦争』講談社 p.34 他。
- 32 同上。
- 33 水木前掲『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』 p.152。水木の初期作品の人物描写にはおどろおどろしいものがあり、必ずしもユーモラスとは断言できないが、おどろおどろしさの中にもどことなく朗らかなユーモラスが感じられる作風である。
- 34 水木しげる (2010)『ゲゲゲの人生わが道を行く』NHK 出版 p.143。1973 年、水木はニューブリテン島を再訪、エプペと再会し、以降再訪を重ねた。
- 35 水木前掲『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』 p.132。
- 36 NHK 前掲アーカイブス「水木しげるさん」。
- 37 NHK 前掲アーカイブス。
- 38 『空手鬼太郎』が鬼太郎シリーズの最初である事は、水木しげる「私の履歴書」水木前掲『水木サンの幸福論』、129-133 頁に明記されている。
- 39 1953 年(昭和 28)年 2 月 1 日から NHK はテレビの本放送を開始。
- 40 水木前掲『水木しげるのラバウル戦記』 p.5。
- 41 NHK 前掲アーカイブス。尚、筆者下線。
- 42 2001 年に講談社から出版された『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』が、2004 年に改題、再編集されたものが『完全版水木しげる伝』である。
- 43 2008 年には『墓場鬼太郎』もアニメ化している。
- 44 水木の妻武良布枝は 2008 年、『ゲゲゲの女房』を発表、二女水木悦子は、赤塚りえ子、手塚るみ子と共に、2010 年、『ゲゲゲの娘、レレレの娘、らららの娘』を発表、同年水木自身も『ゲゲゲの人生わが道を行く』(2008 年の NHK 番組テキスト等を再構成)を出版している。また、同年発表の『カランコロン漂泊記』の副題は「ゲゲゲの先生大いに語る」である。従って、「ゲゲゲ」が水木しげるを指す事は今日広く認知されている。
- 45 「ゲゲゲの～」、「水木しげるの～」の他に、「水木サンの～」がある。
- 46 水木しげる「幽霊一家」水木しげる (2007)『墓場鬼太郎①』角川書店 pp.47-77。初版

- は水木しげる (1997)『貸本まんが復刻版墓場鬼太郎 1』角川書店で、兎月書房版『怪奇伝』からの復刻。
- 47 京極夏彦は、水木しげる (1996)「阿部の奉連想」『ビッグゴールド』2月号小学館に於いて、鬼太郎が霊そのものとして描かれている事を指摘している。
- 48 「本質的な樂園」とは「死」や「病気」の無い世界であることが示唆されている。
- 49 水木は、「土の人」という敬意を込めた意味で「土人」、「小規模集落」という意味で「部落」を使用する旨を、後年の出版で継続的にことわっている。尚、漫画作品中では「森の人」を反復使用している。
- 50 関東水木会・平林重雄「水木しげる詳細年譜」水木しげる (2005)『完全版水木しげる伝(下)』講談社 p.484 水木の妻も「赤札の厚さが三センチにも達していた」他、同様の回顧を記している。武良布枝前掲『ゲゲゲの女房』p.94。
- 51 この段階(「幽霊一家」pp.7-77)では「社長」とのみ書かれているが、後(同書所収「あう時はいつも死人」pp.275-347)には「日本血液銀行頭取」と紹介される。
- 52 厚生省が承認した非加熱血液製剤にHIVが混入していたことを原因とする「薬害エイズ事件」は、裁判で厚生省や製薬会社による同薬剤の危険性事実の隠蔽が明らかにされた。1996年3月に和解成立。
- 53 水木前掲「幽霊一家」pp.56-57。
- 54 前掲作品 p.62。
- 55 NHK 前掲アーカイブス。
- 56 水木しげる「あう時はいつも死人」水木前掲『墓場鬼太郎①』pp.275-374。
- 57 筆者下線。前掲作品 p.265。
- 58 水木前掲作品 p.296。
- 59 水木しげる「吸血鬼と猫娘」『墓場鬼太郎②』角川書店 pp.7-182。
- 60 前掲作品 p.112。
- 61 水木しげる「地獄の散歩道」前掲書 pp.183-357。
- 62 兎月書房版『墓場鬼太郎』では、作品内登場人物としての作者自身は「金野なし太」、血液銀行調査員が「水木」。佐藤プロダクション版に登場する作者自身は「水木しげる」と「水木さがる」。
- 63 水木前掲「地獄の散歩道」水木前掲『墓場鬼太郎②』p.224。
- 64 水木前掲作品 p.225。
- 65 水木しげる「戦争と日本」『小学六年生』2月号小学館、1991年2月1日 pp.51-73。
- 66 水木しげる「地獄」『水木しげる 魍魎 貸本・短編名作選 地獄・地底の足音』集英社 pp.5-132。
- 67 前掲作品 p.78。
- 68 同上。

- 69 菊花御紋章が「天皇制」国家を表象した法的根拠は 1869 年の「太政官布告」第八〇二号、及び 1926 年の「皇室儀制令」。
- 70 「地獄」の絵とほぼ同じだが、絵が不鮮明の為、「コロポックルの枕」から転載した。
- 71 水木前掲「地獄」水木前掲書 p.78。
- 72 「コロポックルの枕」では過度に残酷な絵はカットされている。
- 73 齋藤五百枝 (1884-1966) 画。同書は 2001 年、新・講談社の絵本③『桃太郎』として改訂出版されている。
- 74 武士田忠「『桃太郎』解説」齋藤五百枝画・千葉幹夫文 (2001)『桃太郎』講談社 pp.46-67。
- 75 ジョン・W・ダワーはその著書『容赦なき戦争』に一章を割き「鬼のような他者」を論じている。
- 76 水木前掲「地獄」水木前掲書 p.78。
- 77 筆者下線、水木前掲「地獄の散歩道」水木前掲書 pp.248-249。
- 78 同上。
- 79 フランク永井 (1932-2008)、美空ひばり (1937-1989)、共に昭和の大スターである。
- 80 水木しげる「水神様が町へやってきた」『墓場鬼太郎③』角川書店 pp.5-162。
- 81 前掲作品 p.129。
- 82 前掲作品 p.130。
- 83 前掲作品 p.153。
- 84 水木しげる作詞のゲゲゲの鬼太郎の主題歌にある句が理想の世界を示唆している。句意は「楽しい楽しい、お化けは死なないし病気もないし何もない」。
- 85 水木前掲『私はゲゲゲ』p.201、p.213。
- 86 水木前掲『ゲゲゲの人生わが道を行く』p.96。1995 年の荒俣宏との対談（水木しげる (1995)『雪姫ちゃんとゲゲゲの鬼太郎』角川書店 巻末所収）でも同趣旨の発言が認められる。
- 87 水木しげる「鬼太郎のベトナム戦記」『鬼太郎のベトナム戦記』徳間書店 pp.5-99。
- 88 岩佐陽一「解説 鬼太郎のベトナム戦記」前掲書 pp.202-213。
- 89 岩佐陽一「『鬼太郎のベトナム戦記』原作者水木しげる氏インタビュー『いまから考えると、ねえ?』」前掲書 pp.194-197（参考）。
- 90 筆者下線、水木前掲作品 p.34。
- 91 水木しげる「ヘンラヘラヘラ」『怖悦録』角川書店 pp.255-278。小林よしのりは 2012 年に『脱原発論』を出版しており、水木しげるは 1979 年に福島原発の闇をテーマに絵を描いている。両者とも反原発路線の作品であるが、後者の文は堀江邦夫によるものである。尚、後者は 2011 年に『福島原発の闇』として朝日新聞出版から復刊している。

- 92 イタイイタイ病：富山県下神通川下流域で発生し、1955年に初報告された公害病。
- 93 水木前掲「ヘンラヘラヘラ」水木前掲『怖悦録』p.256。
- 94 同上。
- 95 前掲作品 p.278。
- 96 同上。
- 97 雨宮処凛「水木しげるさんの死～なぜ『戦争反対とは決して言いません』だったのか。の巻」『雨宮処凛がゆく！』<<http://www.magazine9.jp/article/amamiya/24461/>> (2018.5.22 閲覧)。
- 98 同上。
- 99 水木の妻は水木が人々に伝えたいことを想像し、現代人も戦中のような「『生きる力』を取り戻すべきだ」ではないかと書いている。武良布枝前掲書 p.119 頁。また、今日でもプロダクションの見解は変わっていない (2018 年 6 月 4 日メール回答)。
- 100 水木前掲「地獄の散歩道」水木前掲『墓場鬼太郎②』、p.226。
- 101 筆者下線、水木前掲『ゲゲゲの人生わが道を行く』p.70。
- 102 「アンパンマン」作者やなせたかし (1919－2003) は従軍経験があるが戦闘経験はない。
- 103 水木しげる「戦争論」『カランコロン漂泊記』小学館 pp.262-269。
- 104 前掲作品 pp.264-265。
- 105 前掲作品 pp.266-269。
- 106 前掲作品 p.269。
- 107 水木前掲「私の履歴書」水木前掲『水木サンの幸福論』p.102。
- 108 山田宗睦 (やまだむねむつ 1925－)：評論家、哲学者。鶴見俊介 (つるみしゅんすけ 1922－2015)：評論家、哲学者。小熊英二 (2005)『<民主>と<愛国>』新曜社 pp.607-608。
- 109 吉本隆明・田近伸和 (2002)『私の「戦争論」』筑摩書房 p.181 (初版は 1999 年ぶんか社刊行)。
- 110 終戦直後から 1960 年前後の水木は娯楽的戦争漫画を描いており、また、貧困生活の中、妻布枝と二人、模型で「連合艦隊再建」を二度果たしている。「再建した」連合艦隊の前に満面の笑顔で立つ水木と、水木しげる記念館に展示された帝国海軍の艦艇は、一元的反戦思想では理解できない。水木しげる他 (2002)『水木しげる 80 の秘密』角川書店 p.214 (参考)。武良布枝前掲『ゲゲゲの女房』p.113 (参考)。
- 111 水木は二度目の訪問時の印象を、「たった五年のうちに村はすっかり文明に汚染されていた」と書いている。水木しげる (2010)『ゲゲゲの人生 わが道を行く』日本放送出版協会 p.130。
- 112 水木しげる (2012)『水木しげるの古代出雲』角川書店 (参考)。

- 113 水木作品に祖父母は殆ど描かれていない一方、小林作品には祖父を主人公とした作品がある。
- 114 水木しげる (1994)『コミック昭和史 8 高度成長以降』講談社 p.269。
- 115 『コミック昭和史』の発表は 1988 (昭和 63 年) 年 11 月から 1989 (平成元) 年 12 月。
- 116 水木前掲『コミック昭和史 8 高度成長以降』p.276。
- 117 吉本・田近前掲書 p.32 にて、吉本は小林の怒りを当然のものとして共感を示している。
- 118 雨宮前掲記事。
- 119 活字書籍では水木前掲「私の履歴書」p.101、同『カランコロン漂泊記』p.81、同『娘に語るお父さんの戦記』p.169、漫画作品では『水木しげる伝 (中)』p.307 に水木が軍隊内で精神異常扱いされている会話が描かれている。
- 120 呉智英「水木しげるの最高傑作は『水木しげる』である」水木しげる他前掲『水木しげる 80 の秘密』pp.161-182。
- 121 呉前掲著作 p.176 ほか。
- 122 水木前掲『水木しげる伝 (上)』p.167。
- 123 水木前掲『のんのんばあとオレ』p.86。
- 124 水木前掲書 p.202。
- 125 筆者下線、水木前掲「私の履歴書」水木前掲『水木サンの幸福論』p.45。「私の履歴書」は日本経済新聞の連載読み物で、水木は 2003 年に発表している。
- 126 水木しげる・呉智英 (1996)「幻想感覚と現実感覚 1」水木しげる (著) 呉智英 (編)『異界への旅 2』中央公論社 pp.283-293。
- 127 呉前掲著作「水木しげるの最高傑作は『水木しげる』である」p.178 他。
- 128 水木前掲『カランコロン漂泊記』p.203。
- 129 同上。
- 130 水木しげる (1972)「ああ天皇とボクの五十年」『漫画半分』創刊第 1 号、面白半分 pp.9-28。加えて、水木は 2003 (平成 15 年) 秋の叙勲では旭日小綬章を受章。
- 131 岩佐陽一 (2011)「水木しげるインタビュー」水木しげる『水木しげるの連合艦隊』徳間書店 pp.328-345。
- 132 筆者下線、岩佐前掲記事 p.338。
- 133 筆者下線、岩佐前掲記事 p.345。
- 134 ここでいう「ナショナリズム」とは、国家主義のみ意味するわけではない。特定の思想や運動により水木の思想を捉えようとする「ひとびとの運動」も含むものである。
- 135 NHK 前掲アーカイブス「水木しげるさん」。
- 136 NHK 前掲アーカイブス。

参考文献

漫画作品

- 小林よしのり (1998)『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論』 幻冬社
- 水木しげる (1972)「ああ天皇とボクの五十年」『漫画半分』創刊第1号 面白半分 pp.9-28
- 水木しげる (2006)『墓場鬼太郎 ①-⑥』 角川書店
- 水木しげる (1996)「阿部の奉連想」『ビッグゴールド』2月号 小学館
- 水木しげる (1997)『貸本まんが復刻版墓場鬼太郎 1』 角川書店
- 水木しげる (2005)『完全版水木しげる伝 (上中下)』 講談社
- 水木しげる (2010)『鬼太郎のベトナム戦記』 徳間書店
- 水木しげる (2010)『カランコロン漂泊記』 小学館 pp.262-269
- 水木しげる (1994)『コミック昭和史 1 関東大震災～満州事変』 講談社
- 水木しげる (1994)『コミック昭和史 6 終戦から朝鮮戦争』 講談社
- 水木しげる (1994)『コミック昭和史 8 高度成長以降』 講談社
- 水木しげる (2009)『水木しげる 魍魎 貸本・短編名作選 地獄・地底の足音』 集英社
- 水木しげる (2008)『神秘家水木しげる伝』 角川書店
- 水木しげる「戦争と日本」『小学六年生』2月号 小学館 1991年2月1日 pp.51-73
- 水木しげる (1996)『怖悦録』 角川書店
- 水木しげる (2001)『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』 講談社
- 水木しげる (2012)『水木しげるの古代出雲』 角川書店
- 水木しげる (2010)『私はゲゲゲ』 角川書店
- 水木しげる (1995)『雪姫ちゃんとゲゲゲの鬼太郎』 角川書店
- 山野車輪 (2005)『マンガ嫌韓流』 晋遊舎

絵本

- 小池正胤・叢の会 (1989)『江戸の絵本IV』 国書刊行会
- 齋藤五百枝画・千葉幹夫文・武士田忠解説 (2001)『桃太郎』 講談社

著書・著述

- 岩佐陽一 (2011)「水木しげるインタビュー」『水木しげるの連合艦隊』 徳間書店 pp.328-345
- 小熊英二 (2005)『＜民主＞と＜愛国＞』 新曜社
- 小山昌宏 (2007)『戦後「日本マンガ」論争史』 現代書館
- 呉智英 (2002)「水木しげるの最高傑作は『水木しげる』である」水木しげる他『水木しげ

る 80 の秘密』 pp.161-182

ジョン・ダワー (2010)『容赦なき戦争』 平凡社

水木悦子・赤塚りえ子・手塚るみ子 (2010)『ゲゲゲの娘、レレレの娘、らららの娘』 文藝春秋

水木しげる (2010)『カランコロンの漂泊記』 小学館

水木しげる (2010)『ゲゲゲの人生 わが道を行く』 日本放送出版協会

水木しげる (1999)『ねぼけ人生』 (新装版) 筑摩書房

水木しげる (1990)『のんのんばあとオレ』 筑摩書房

水木しげる (2015)「水木しげる出征手前手記」『新潮』2015年8月号 新潮社 pp.145-166

水木しげる (2007)『水木しげるの娘に語るお父さんの戦記』 河出書房

水木しげる (2010)『水木しげるのラバウル戦記』 筑摩書房

水木しげる (2004)『水木サンの幸福論』 日本経済新聞社

水木しげる他 (2002)『水木しげる 80 の秘密』 角川書店

水木しげる・呉智英 (1996)「幻想感覚と現実感覚 1」水木しげる (著) 呉智英 (編)『異界への旅 2』 中央公論社 pp.283-293

武良布枝 (2008)『ゲゲゲの女房』 実業之日本社

吉本隆明・田近伸和 (2002)『私の「戦争論」』 筑摩書房

Roman Rosenbaum 'Introduction: the representation of Japanese history in manga' Roman Rosenbaum "Manga and Representation of Japanese History" Routledge, 2013, Oxon, pp.1-17

インターネット上の資料

雨宮処凛「水木しげるさんの死～なぜ『戦争反対とは決して言いません』だったのか。の巻」『雨宮処凛がゆく！』 < <http://www.magazine9.jp/article/amamiya/24461/> > (2018.5.22 閲覧)

NHK 戦争証言アーカイブス「証言」所収「水木しげるさん」

< http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001130006_00000 > (2014.4.8 閲覧)

NHK 前掲アーカイブス「山口政七さん」

< http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001100560_00000 > (2014.4.8 閲覧)

NHK 前掲アーカイブス「澤邊邦雄さん」

< http://cgi2.nhk.or.jp/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001100607_00000 > (2014.4.8 閲覧)